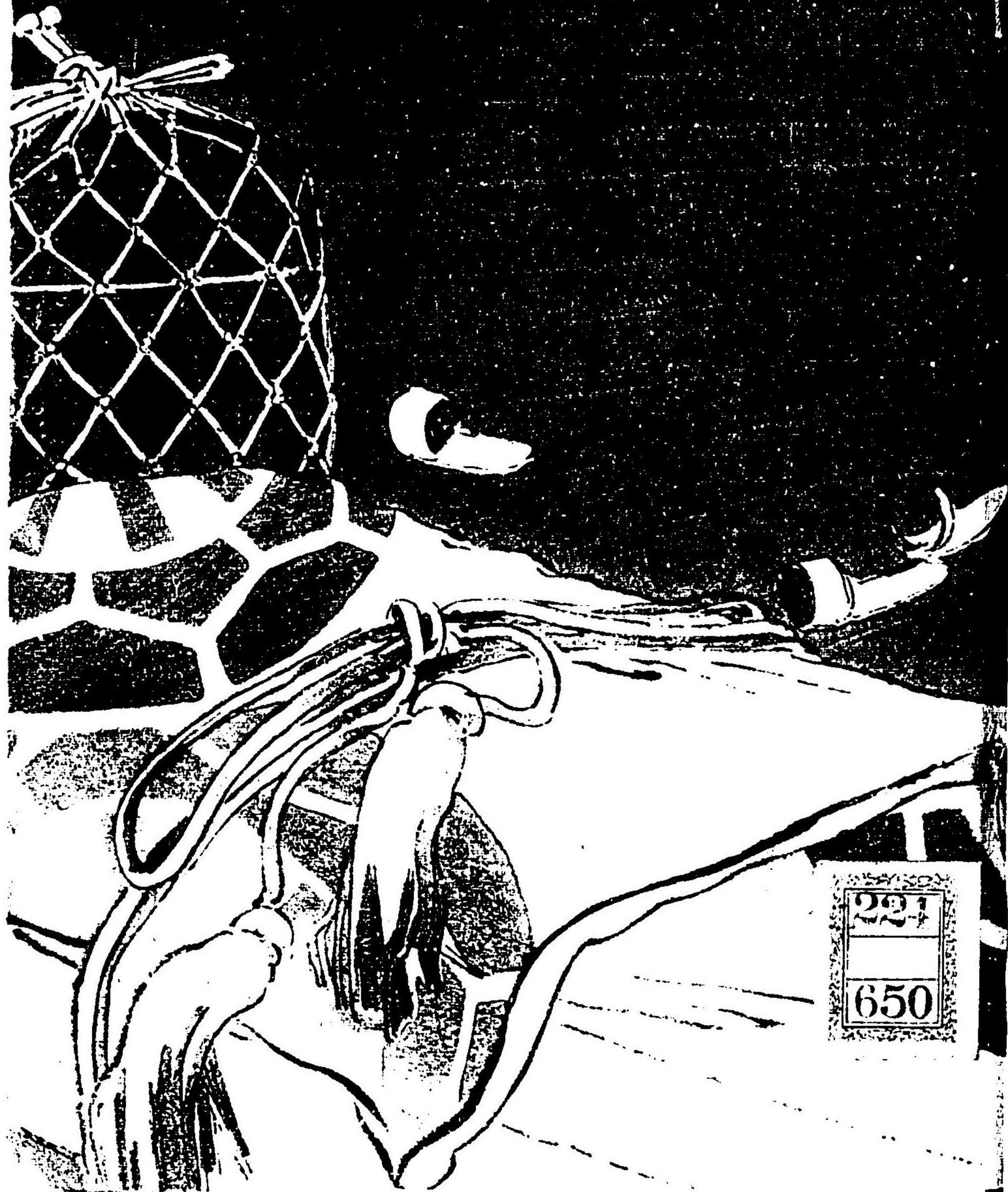


273



294
650



おもかげ自序

法師はおもかげを三義に分てり、その詠分けし歌に

おもかげは身をもはなれずなれく、わかるゝ方

もえら川の關、是は髪髭と其物を見る意なり、

秋のなごりながめし空の有明に、おもかげ近き冬の

三日月、是は能く似たる意なり、

よしさらばとはすばとはす有もせで、おもかげばかり

り來て歸るらん、是は唯そとばかりの意なり、



さて我がこの冊子は、姉妹の面影の見紛へるを描きしな
れば、その意は右の第二首の歌に屬して、秋のながめに
能く似たる冬の三日月。否、是のみは似ぬ天邊の満月、
はて天邊の満月とは既しと、逸りてな問はせ給ひそ、そ
れを明さば物語の底を破り、底を破らば興味失せん、さ
ればたゞ專念に研しとのみ思しつ、一向この一卷を讀了
へて知らせ給へ、

仰天子識す



一 げ か も た



げ

仰天子著

納して、從五位に叙せられたば、大身代である事は言ふまでもない、所がその從五位殿は、妻と前後して先年没して、後には叔父に後見をされる姉妹の孤子があるばかりだ、

色いろの白しろい、目めのぱちり爲なした、鼻はなのつんと高い、故ゆゑとらしい事ことは、口くちの締しつた、やゝ愛あいに乏なしい顔かほ立たてはあはれぬ、趣おもむきも申ま分わはないのだから、美人びじんらしい、そして中なか丈ぢやうで、優やさ形かたちで、姿すがたにも申ま分わはないのだから、美人びじん

第

三

番

私

市

といふ

家

がある、

嘗かつて

海防費

を献

進

と聞つても差支はあるまい、
 妹は末子といつて十八で、そして……否、此處で並べ立てると
 重複の恐があるから、たい名と年とだけに爲て置いて、すぐ次の
 姉妹總叙の項で委しく書かう、
 瓜二つと謂ひたいのだが、たい外貌が似て居るだけではないのだ
 から、そんな譬ぐらゐでは追付かない、末子の顔立や姿形は、す
 でに元子の條下で述べたのと、一點の相違もない上に、二人は身
 の取爲から、物を見る目使から、細くつて張のある聲音から、話
 す時に歪めて掛る口振から、なほ勝氣な心の持方までも似て居る
 のだ、斯うまでにそっくり酷似して居ると、二つ進の年の相違が
 姉妹を見分けるに於て聊かも効がない、全く同年のやうに見える
 まだしも自分で人に間違へられないやうにと、二人が互に申告せ
 て、姉は髪を高島田に、妹は束髪に結つて居るから、一目で區別

が付くやうなもの、もし同時に髪を洗ひでも爲た日には、どれ
 が元子だか末子だか、本人二人を除いた外は、所謂元末が分らな
 くなつて了つて、貴女はごちら様の方で、まづ問はなければ物
 が言へないと言ふ願ひさ、たい僅に似ない所のあるのは、形體を
 離れた嗜好ばかりだ、元子の方は音曲を好んで、和樂も洋樂も一
 通りは修めて居る、所が末子は遊藝なんぞ一口に賤めて、すつ
 と飛離れた洋學に耽つて居る、華族女學校を退いてからも、英語
 の女教師を自宅へ聘して、今に學習して居るのだが、元子もまた
 意地になつて、何の女の癖に高慢臭いと是を貶す、其處で兎角意
 氣が合はない、元來が勝氣同志の所へ持つて来て、好の相違から
 誹り競をするのだから、自然仲が好くない譯だ、けれど親が亡
 後は、たい二人限の姉妹だからと言ふので、双方少しづつ忍び合
 ふ所があつて、表面だけはまづ睦じさうに見える、
 今も二人は一室へ集まつて、例の表面ばかり睦しく話して居る

ので、

此處へお春といふ小間使が来て「小さいお嬢様、三原さんが入ら

つしやいましてございます」「さう、すぐ居間へ通つて貰つておくれな、そしてね、妾少し用

があるから、どうぞ暫くお待ち下さいまして」「ぢやア末子さん、妾がお相手になつて居ませうよ、あの方はお

話がお面白いから……」

三原といふのは四十恰好の女で、名は竹枝と言つて、米國で修

行した語學者だ、それも語學教授を家業に爲て居るのだけれど

我が家へ弟子は取らない、學校へも勤めに出ない、専ら華族や豪

家へ取入つて、其處の姫君や令嬢達へ出稽古を爲て、巧みに世を

渡る才物だ、竹枝は末子の居間へ通つて、やがて出て來た元子の頭を不思議

さうに見上げながら「おや、お珍しい、末子様も高島田にお結ひ

遊ばしまして」「いや、妾は姉でござりますよ」「あら、まア左様で居らつしやいましたか、妾はついね、おほゝ

ととと」

第 貳

三原竹枝は末子への教授を了へて、次は飯田町の杉中といふ家

へ行つた、すると「三原さん」と呼びながら、玄關へ走つて出た男がある

それは當家の三男で、名を小五郎と言つて、年は二十八歳だが、

色白の小造の優男だから、二十四五には屹と見える、竹枝は慇懃に首を下げて「これは小五郎様、何か御用で居らつ

しやいますか」「お頼み申したい事があるんです」

「ちやアお嬢様のお稽古を了ひましてから……」
「いえ、私は直に他へ出るかも知れませんが、妹の方は後へお
回し下さつて、些と居間まで」

「ちやア左様にいたしませう」

小五郎は竹枝を我が居間へ誘つて、茶よ菓子よと持爲しながら
「三原さん、貴女は縁談の取持に慣れて居らつしやるから、お頼
み申すのですがね」

「おや、妾を媒介屋に遊ばしてさ、おほ、おほ、併しどう
言ふ御縁談で」

「貴女は今でも三番町の私市へ行つてらつしやるでせう、實はあ
の家へ……併しこの事は私が自分で言ふのは變なもので、父から
お頼み申す筈でしたけれど、銀行の事務が多忙ですから、私が代
つて願ふのですが……」

竹枝はじつと顔を見詰めて「ちやア貴女私市様へ御養子に……」

小五郎は無言で軽く頷いた、
「成程、それは丁度お宜しい御縁で、ですが貴君元子様を御存じ
で居らつしやいますか」

「知つて居ますとも、妹さんの末子さんも知つて居ます、毎年一
月になると歌留多を取りに行くので、あの姉妹に酷く引搔かれた
事さへあるんです」

「へえ、そんなにお心安ければ、尙更都合が宜しうございます」
「ちやア橋渡を爲て下さいますか」

竹枝は急に走り出して「でございませうけれど……私市様へ申し
たいけでは参りません、御後見の叔父御様の方へもねえ」

「無論です、私市はごうでも、後見の玉木の方へ話して頂きたい
のです、信用されてらつしやる貴女から」

「はい、でもごうも何でございますよ、斯様な事を申すものは、
馬鹿に氣骨が折れましてねえ」

小五郎は斟酌なく「その代りにお禮は爲ますさ」
「有難う、でもどうも日が潰れまして……」

小五郎はにつと嘲るやうに笑つて「三原さん、何もそんなに勿體を付けなくつたつて、貴女は相應の禮さへ取つたら、随分人も殺し難ねないぢやありませんか」と頗る亂暴な事を言放つた、
だが竹枝は立腹も爲ないで「あら、そんな事を仰しやいますよ人聞の悪い」

「はい、それは嘘だが、今の事は頼みますよ」
「でも……」と竹枝はまだ澁つて居る、

「ぢやアまづ手付を」と小五郎はまた無遠慮な事を言つて、竹枝の帯際へ目を注げながら「貴女それは銀時計ですね、私が好いのを上げませう、些と待つて居て下さい」と言流して出て行つたがやがて妹の金時計を鎖付のまゝ提げて来て「これは元々女持で、私には小過ぎますから、どうか貴女お持ち下さい」

「おや、左様でございますか、こんなにまでなすつて、お頼み遊ばすお心がお甚惜しうございますから、ぢやアまア……」

「是非お取持を」

「はい、その氣で盡力いたしましたら、この御縁は多分調ふでござりませうよ、ですが小五郎様、貴君はお浮氣で居らつしやいますから、今から申して置きますが、首尾好く御養子にお入り遊ばした上で、能く似て居るから間違へたなぞと仰しやつて、末子様のお袖をお引き遊ばしては可ませんよ、おほゝゝゝゝ」

「どうして、私はそんな不道德な事をする人間ぢやアありませんさ」

第 三 卷

私市家の後見人を玉木文平と言つて、元子末子の亡父の弟だ、年は五十五六でもあらうか、何日にもたくと笑顔の好い老人で用があつたら私市へ出掛けるけれど、常は富士見町の我が家への

み居るのだ、

竹枝は小五郎から拜領した時計の金鎖を閃かして、杉中方を出ると直にこの玉木へ来て、主人へ面會を申し入れた、

文平は私市方で織つて居る間柄だから、風邪だけれども言ふ断り付で、奥座敷へ通して逢つた、

竹枝は懇懇に手を突いて、くどくど挨拶を爲た上で「お風邪ださうでございませうが、それは可ませんでございませうねえ」

文平は例のいたく顔で、三四分も伸びた頸鞆を撫でながら「なに、重い風邪ではないのですけれど、今度は大層長引きましてね併しもう二三日で全快するだらうと、醫者も言つてくれて居ますので」

「ちやアもう御安心でございませう、時に玉木様、妾は頼まれて……参つたのではございませせん、丁度お似合のお仲だらうと心付きましたので、お伺ひに参つたのでございませうが、私市様の元子様も

お年頃でございませうから、お婿様をお貰ひ遊ばしたら如何でございませう」

「左様ですれえ、實は妹の方は分家させる事になつて居ますゆゑまづあれの片を付けて了つて、その上で姉へ婿を貰ふ積ですから別段急ぎも爲ない事だと、緩り構へて居るのですが、なに、好い養子がありますなら、姉の方から極を付けても宜しいのです、何

ですか三原さん、何處かに好いお心當りでも……」

「はい、妾がね、丁度お似合だと存じ付きました方がございませうので」

「な、成程」と文平は膝を進めて「それは何處の何といふ……」

「貴君も御存じで居らつしやいませう、飯田町の杉中様の御三男でございませう」

「ちやア何とか……小五郎とか言ふ男ですか」

「左様でございませう」

「む、あの勇なら私も逢つた事があります、成程、丁度好い
かも知れない、併し幾歳ですね」

「二十八にお成り遊ばしますさうで」

「ぢやア年の頃も丁度好い、本人の元子が何と言ふか分りません
が」と言ひさして首を傾げ「あれも職つて居るかも知れない」

「はい、毎年一月になりますと、御一所に歌留多をお取り遊ばし
ますさうでございますから、能く御存じの筈でございます」

「は、ア、それでは大きに話が爲好い、兎も角本人の量見を聞い
て見て、厭でもないと言ふやうでしたら、早速親類へ相談をして

姉の縁を先に極める事に爲ませうよ」

竹枝はまづ占たといふ色をうつかり見せて「どうかねえ玉木様
左様にお計ひのほどを願ひますでございます」

「と恰も絶らないばかりで、先に親切のやうに言つて居たのは、大きに齟齬して居
るのに氣付かない、

だが文平も氣付かないで「はい、私は好い縁だと思ひますから
なるべく纏める積で話させう」

「有難うございます」こまた圖らず禮を言つて「ぢやア今日は
暇を申しまして、何れ明日お返辭を承りに参りますでございます」

「いや、さう早くは運び難ねますよ、私は醫者からまだ外出を止
められて居ますし、また元子を故々此處へ呼寄せるほど急ぐ事柄

でもありませんから、全快の後私が出掛けて、そしてその時の話
の模様は……左様さ、私の方からお宅へ御通知する事にいたしま

せうよ」

「左様でございますか、ぢやアお待ち申して居りますから、どう
ぞ何分宜しく……」又しても尾を出して、竹枝はいそくと引下

つた、

第四

玉木文平が竹枝を玄關へ送り出すと、丁度其處へ甥が来たので早速我が居間へ連れて入つた、甥といふのは文平の姉の次男で、根井芳也といつて、年はまだ三十だが、敏腕の法學士で、今は或省の書記官を勤めて、随分聲望もある方だ、だが上唇を刳上げた大反齒で、加之に粒の深い黒痘痕で、容貌頗る揚らない、洋服の芳也は、窮屈さうに坐りながら「叔父様、お風邪は如何でございますか」

文平は例の通り和かに「もうこの通りだ、まづ死にも爲なかつたよ、はよはよはよ、何れは、姉様は御壯健かね」

「はい、母はお蔭で至極壯健でございます、時に叔父様、私は今度英國へ参る事になりました」

「やア、それは大變だ、矢張り役所の方の御用でいも行くのかね」

「左様でございます、彼方に取調の廉がございまして、およそ一

年間ほど倫敦に滞在の積で」

「さうか、それは併し結構な事だ、何れ大臣に見込まれて、多勢の中から目指された事だらう、どんな調へ物か知らないが、何しろ大役に相違ない、その大役を無事に勤め上げると、また出世が出来やうと言ふ譯で、お前に取つては目出たい事だ、そして芳也何日出発するのだね」

「多分來月の末にならうかと存じますので」

「ぢやアまだ急がない事だが……どうせ役所の連中やら、平日心安くする朋輩やらで、送別會が何度もある事だらうけれど、親類は親類で別に一會開かうよ」

「有難うございます、就きまして……母が叔父様へお目に掛りたい事がございましてさうで……」

「はてね」と文平は小首を捻りながら「そ、それはどんな用だね」

芳也は言難ねる様子で、暫く猶豫つてから「それは何でござい

ます、母から親しく申上げますさうで、何しろ御都合を伺つて来てくれと申しましたから、只今役所から歸り掛に回つて参つたんでございませうが、今日はお差支はございませんでせうか」

「無いとも、差支は少しも無いよ、まだ二三日は外出は出来ないので、今日には限らない、明日も明後日も差支はないのさ、必ず宅に居るのだから」

「ちやア私は歸りまして、委細を母へ傳へますでございませう」

「さうかね、何れ今の送別會の打合せもあつて、私はお前の方へ行くけれど、お前も洋行前には是非緩りと遊びに来てくれるが好い」

芳也は返辭も其所々々に歸つて行つた、

その夜切髪のお女が来たが、それがすなはち芳也の母で、根井家の未亡人だ、名は三木子といつて、文平よりは五つ六つも年上で、目が大きくつて、鼻が高くつて、口が小さくつて、私市の姉妹と伯母姪の間柄だけに、容子が全く似て居るので、

文平は直に奥の座敷へ通して「姉様、實は心待に爲て居ましたけれど、餘りお遅いもんですから、明日だらうと思つて居ました、夜分に入らつしやる位では、何か御急用なんですか」

三木子は御殿持の烟草入を出して、まづ緩かに一服吸つてから「いえ、急用といふほどの事でもないんですけれどね、まア矢張り急ぐんです、芳也が洋行をするやうになつた事は、今日お聞きでしたらうが、あれが出發するまでにね、私市へ養子に遣りた

いと思ひますので」

文平は不斷の笑顔で忽ち變じて、珍しくも眉を皺めた、

第五

根井三木子は目を据ゑて弟を見ながら「ねえ文平さん、妾は決して恨を言ふのぢやアありませんけれど、私市の親類に、丁度芳也といふ明いた身體があるので、あれを元子の婿に爲て、

同家の相續をさせるのが當然だらうと思ひます、就いては妾の方
 で黙つて居ても、後見人のお前さんから、氣を利用して切出して下
 さるだらうと、實は今日まで待構へて居たんですが、そんな様子
 は少しも見えない、それに芳也が英國へ行つて了ふと、一年は歸
 れないと言ふのですから、自分の方から足を運んで、斯うしてお
 話に來たんですが、何故打遣つて下すつたの」と養子に取ら
 せる権利でもあるやうに言ふのだ、
 文平は返辭も爲ないで俯向いたまふ、これは困つた事が起つて
 來たと、心ひそかに當惑を爲て居るのだ、あの元子が我が姪なら
 芳也も同じく我が甥だから、可愛いに二つはなし、また今日まで
 に氣が付かないでもなかつたのだから、姉に強請されなくても、
 我から進んで取持つた筈だが、何分芳也は格外の醜男だし、元子
 はあの通りの美人だから、この縁組は至極不釣合だと思つて、知
 らない顔で打過ぎて居たのだ、だが其處には少し身勝手も潜んで

居る、可愛に二つはないとは言ひながら、親しく後見を爲て居る
 のだから、自と元子へ最負目が付く、だから芳也の爲を思ふのは
 二の次で、まづ元子の爲を思ふ、就いては彼等二人を夫婦に爲て
 は、元子が可哀さうだと思ふのだ、
 「文平さん、何故ですよ」と三木子はまた、返答を促した、
 「なに、その、今までは別に急ぐ事でもないと思つて居たもので
 すから……」
 「だつて元子はもう二十歳でせう、女の二十歳は、縁が遅れて居
 る位ちやありませんか、それも好い婿がなくつて、自然に遅れる
 のなら仕様がなないけれど、妾の次男に似合の者があるんだから、
 あれが大學を卒業した時、直に言つて來て下すつても好かつたん
 さ、まアそんな愚痴らしい事は止して、妾は芳也に身を堅めさせ
 てから、洋行をさせたいんですからね、急に貰つてくれるやうに
 話して下さい」

「けれど眞に生憎で、すでに飯田町の杉中の三男を貰ふ事に……」
「おや、今お前さん急がない事だと言つて、ゆるく構へて居るやうなお話でしたか」

「それはそうです、まづ末子を分家させてからの事と思つて居たんですが、幸ひの縁ですから、いつそ元子の方を先に……」

三木子は俄に辟鏡く「でも極つて了つたんぢやありませんか、え、親類の妻の方へまだ御相談がないんだから」

「それは全くその通りです」

「ぢやアそんな方は止して了つて、是非芳也に極めて下さい、あれはたい法學士といふ肩書だけでも、世渡りに不自由は爲ません別して今は書記官で、人選の上英國へ出張させられるほど用ひられて居るんですから、何も養子なんぞに送らなくつても、立派に獨立がさせられるんですけれど、私市は妾が生れた家だから、我が子に相續させたいと思つて、それでこんな言ふのです、です

から文平さん、是非どうぞ婿は芳也に極めて下さいよ」

文平はまだ元の笑顔に返らないどころか、ますます困難の面持

で「でもその……何分私一量見で極めると言ふ事は出来せんか

ら……ぢやア斯うしませうか、全快次第に私市へ行つて、元子に

委しい事を話して、杉中の方が好いか芳也か好いか、本人の心任

せと言ふ事にねえ、それで姉様どうでせう」

三木子は素直に承知した、杉中の三男はどんな男か、容貌では

芳也は負かされるだらうけれど、元子はこの伯母に遠慮して、顔

を立てるに相違ないと確信するからなので、

第六

永田町の山王下に、四間か五間もありそうな、格子戸造の新築の一軒家がある、それが三原竹枝の住居なので、今表で自用車を下りて、走りの好い格子戸をからくと明ける

と共に、大聲の早口で「三原さんお宅ですか」と言つたのは、杉

中の三男小五郎だ、腰の曲つた婆やが直に取次に出て「はい、居らつしやいます、

貴君様は……」

婆やの後へ忽ち竹枝の顔が顯れて「おや、小五郎様で居らつし
やいますか、まア妾は驚きましたよ、こんな家が能くお分りにな
りましたてございませぬえ、さア、どうぞ此方へ」と先に立つて、

自ら奥座敷へ導いた、

其處は八疊の間で、種々の品々が目眩るしいほど飾り立てゝあ
るのだ、文晁とある落款だけは能く擬せた秋景山水、載せた洋書
には適合の悪い蔭繪の書棚、花も入れない九谷の花瓶、白晝だの
に菊燈式の盞洋燈、毛絲の編物を下に敷かせた京人形、塗柄房附
の奈良團扇、素銅の唐手爐、縮緬細工の薬玉といふ風で、四季畫
夜の差別もなく、頗る不調和に雑陳した有様は、全で骨董屋の藏

ざらへと謂ふものだ、

小五郎は呆れ顔で「やア、大層並べ立てましたね」

竹枝は却つて自負の體で「はい、どうぞお手にお取り遊ばして
ゆるく御覽下さいまし」

「いや、それには及びません、皆結構らしい」

「是はどれもね、妾が上りますお邸方で頂いたんでございます」

「はア、さうですか」と言ひながら、小五郎は一渡り見回して、
また例の無遠慮に「でも三原さん、私が上げた金時計がさ、この
中に見えないぢやありませんか、質屋へでも遣りましたか」

「あら、あんな可哀さうな事を仰しやいますよ、頂いた時計は大
切にいたしましたして、居間の小箆箆に納つてあるんでございますも
の……それで思ひ出したんではございませぬけれど、昨日は有難
うございました」

「やア、それぢやアお禮の催促に來たやうだ」

「ほゝゝ、だつて左様でない事は能く存じて居ります。外の事ではなら入らしつて下さる貴君ではございませぬもの、これも矢張り戀ゆゑで……ねえ、左様でございませう、おほゝゝゝ」

「全く、全くさうです、昨日玉木へ行つて下すつたでせうねえ」

「参りましたとも、あれから直に参りました」

「そして、どんな模様でしたか」

「まアお悦び遊ばし、其處は妾でございませぬ、旨く持掛けましたからね、先方様も大層お乗地で居らつしやいます」

「はゝゝ、それは何より結構ですが、まだ確な事は分らないんですか」

「はい、生憎玉木様は御風邪で、二三日待つてくれろ、全快次第に私市へ話しに行くから……」

「二三日、そりやア待遠い、だが貴女のお見込はどうです」

「妾は屹と叶ふだらうと存じます、何しろこの辯口で説付けたん

でございませぬから、玉木様もお悦びで、この縁談は是非纏めるとまで仰しいましたからね」

「成程、ちやア首尾好く行きさうですなえ」

「左様でございませぬとも、お返事は妾方へなすつて下さるやうに極めて参りましたが、もう大船に乗つたやうなものでございませぬよ」

其 七

根井の家は内幸町の土手際で、大きい冠木門のある立派な邸だ次男の芳也は今役所から歸つて来て、折靴を我が居間へ投込むと、直に茶の間へ走り付けて、「阿母様、叔父様のお返事はまだですか」

三木子は締つた口元に笑を見せて「まだお前昨日の詞で、二三日してから私市へ話しに行くと言つてたんだもの、早くつて明日

か、それとも明後日でなければ知らして来かいさ、昨夜お前にその事を話したぢやアないか」

「それは承りましたけれど、併し早く分らないと困るんです、私は来月下旬に出発する積でしたのに、今日役所で俄に模様が變りましてね、本月中に出発する事になつたんです」

「おや、ぢやアもうお前、後二十日はかりより無いぢやアないか」

「さうです、それも私には気が急けてならないんです」

「ぢやア成程、ぐづぐづしちやア居られないねえ、だがまあ今日だけは待つて見て、もし何の便もなかつたら、明日妾が行く事に為やうよ」

「どうかさう願ひます、いよゝゝ縁談が調ふ日になりますと、支度を為なくちやアなりませんからねえ、たゞさへ洋行が早くなつて、その方の支度が急ぐ所へ持つて来て、また養子に行く支度を

する事になると、實に繁忙に堪へまいと思ひますから、少しも早く縁談の結果を知りたいと思ふんです」

「だがね、私市の方は……表立つて返事がないと言ふだけの事で實は極つたのも同じ事だから、玉木からの便なんぞ待つて居ない急に荷物の支度に掛らうよ」

「でも本人の元子さんが何と言ひますか……」

「いゝえ、元子に不承知のある譯はないさ、何だか玉木の話ぢやア、杉中の方からも望んで居るとかだけれど、固りお前を婿にするべき筈の所へ、此方から口を切つて言込んだんだから、厭と言はれる義理ぢやアないのさ、妾に對しては聞入れる事は見えて居る、それは確に受合つて置くよ」

「さうだともさ、だからお前硯箱を此處へ持つて来て、妾の言ふ

ア大丈夫ですなえ」

品敷を書いて見ておくれな、そして是々の物を新調すると極めた
上で、電話で呉服屋を呼寄せ、事にしやうよ、妾は實はね、いよ
いよ表向の返事を聞いてから支度に掛つても……其處は男の着類
だから、日はたんと掛らない、この月中には出来上るだらうから
来月早々婚に遣る、するとお前が英國へ行くまで、まアざつと
一月足らず私市に居られるのだと、もつくり考へて居たけれど、
洋行がそんなに早くなつたとすると、婚禮の方も繰上げてさ、こ
の二十日頃までにはさせたいから、どうして返事を待つちやア居
られない」

「ちやア品敷を爲ませうか」
「さう、早く書いて見ておくれな、妾は馬鹿に氣が急けてならな
い、だがまア洋行が早くなつたお蔭で、それだけ早く安心が出来
ると言ふもんさ、お前が人選の上で西洋へ遣られるのは嬉しいけ
れど、實は何日までも役人なんぞ爲て居ては詰らない、退々昇進

して大臣になつた所で知れたもんだから、何でも私市の相續人に
爲て、あの大身上をお前の物にさせたいと、その事ばかり思つて
居たんだが、だら／＼急に念が達かうと言ふので、こんな悦ばし
い事は……」

芳也は是を聞くのが厭さに、つと硯箱を取りに立つた、女に縁
遠い醜男だから、美人の婿になる事は嬉しいのだが、優に獨立の
出来腕があるのだから、慾で養子に行く心は少しもないのだ、
さて一時間餘りも経つと、出入の呉服屋が招かれて、品々の注
文書を受取つて歸つた、

其 八

三原竹枝は宵張の朝寢坊で、夜が明けても夜中の夢で寝て居る
所を、婆やに強く揺起され、小五郎が来たと聞いて、忽ち眉を蹙
めると一時に、べろりと長い舌を出して、序にゆる／＼生欠伸を

爲て、そして奥座敷へ通せと命じて、やうくの事で起上つた
また身支度に時を經たして、さて悠々と逢ひに出た、

「三原さん、玉木からもう返事が來ましたか」

「はい、まだ參らないんでございますよ、玉木様は二三日と仰し、

やるんでございますから、明日まで待つて見ませんかちやア……」

「さうでせうかね、私はもう分つたらうと思つて、平日になく

早起を爲て、貴女の寢込を襲つたんですけれど……何しろ三原さ

ん、只べんく待つちやア居られませんから、貴女お氣の毒だ

が、玉木へ催促に行つてくれませんか」

「なに、それはね、色々お心をお付け下さる貴君の御用でござい

ますから、参ります事は厭ひませんけれど、お話が極るとすぐ宅

へ御通知下さるやうにと、玉木様とお約束が爲てあるんでござい

ますからね」

「だつて只待つて居ると催促をするのと、事の運が違はうちや

ありませんか」

「それも左様でございませぬ、ちやア早速参る事にいたしましたせ

う」

「さう爲て下さい、昨日の貴女のお話で、安心は爲て居るんです

けれど、いよくを聞かない内は、ほんとの大安心が出來ません

から」

「併し小五郎様、昨日貴君が仰しやいました事は、お間違はない

でございませうね」

「成功金の事ですか、それを間違へる小五郎ちやありませんや、

無酬では働かない貴女だと知つて、お約束申した位ですもの」

「はい、もう澤山、貴君はちきそんな薄情い事を仰しやいますよ」

「はい」と小五郎は不思議さうに見て「どちらが薄情いんだか、は

い、併し三原さん、貴女行つて下さいますね」

「はい、只今から直に参ります」

「直ですよ」と念を押して小五郎は立去つた、竹枝はゆるく朝飯を済ませて、さて富士見町の玉木の家を訪れた、文平は早速奥の間へ通して「三原さん、貴女縁談の事でいらしたんでせうが、まだ私市へ行かないで居ます、けれど今朝やうやう醫者の許を受けて、御覽の通り髻を剃りましたから、實は今から行かうと思つて居た所なんです」

「左様でございますか、ちやア早くお返事を承りたうございますから……妾は此方でお待ち申して居りませうか知ら」

「さうですわね、ちやアさうなすつて下さい」

この時小間使が来て、旦那様、内幸町様の御隠居様が入らつしやいましてございます

文平は顔を蔽めて「さうか、だが此處へ来て貰つては差合があるから……居間の方へ通してくれろ」

三木子は心安立に案内を待たないで、すつと此處へ入つて来た、

文平はまたひそかに顔を蔽めた、

其 九

竹枝は三木子を識らないのだが、當家へ親しい人だと見て、速しく座を譲つて、そして叮嚀に黙禮を爲た、

三木子は竹枝をうそく胸して、暫く會釋を爲ながら上座に着いて「文平さん、妾は返事を聞きに来たんですが、もう本人の量見を聞いて下すつたでせうねわ」

文平はごままして「い、いわ、まだなんですよ、今もその、この方へ申して居たんですがね、やうく醫者の許を受けて、今朝髻を刺つたばかりなんです」

「おや、妾はもう行つて下すつたらうと思つてたのに……それちやア何日行つて下さるの」

「今から行かうと思つて居たんです」

「ぢやアどうぞ早速行つて下さい、芳世の洋行が一月も早くなりましてね、妾の方では大層返事を急ぐのですから……なに、改まつてお返事を聞かないでも、先方に異存のある譯がないんですから、妾の方ではもう支度を為始めた位で……」

「はッ、もう支度を」

三木子は頷きつゝ「……安心はして居ますけれど、實は今日お返事を聞いた上で、婚禮の日を極めて了はうと思つて、それで故々出て来たんですの」

「そ、そ、それは貴女、餘り早過ぎます、まだ本統の事が分らない内から日を極めるなんて」

「だから返事を聞いた上でと言つてるぢやありませんか、兎に角早く行つて下さいよ」

「行きますとも、どうせ行く積りで居たんですから、ぢやア早速」と文平は立掛けたが、竹枝と二人を後に置くのが不安心なので

「併し貴女は御歸宅の上お待ち下さい、お返事は別使を以て御通知申しますから」

「だつて序に婚禮の日を極めて了ひたいんですからさ、歸つて又来るのも面倒です、妾は此處で待つて居ませうよ」

文平は是非なく二人をそのまゝに爲て出て行つた、

竹枝は彼等の話の模様を怪しんで居たので、今二人切になつたのを幸ひに、三木子の方へ膝を向けて「失禮でございますが、貴女も御縁談の御用で入らした御様子でございますね」と問掛け

「はい、妾の次男をね、三番町の私市へ養子に遣はさうと存じまして」

竹枝は忽ち驚いて「おや、まア左様で居らつしやいますか、へわ、ぢやア矢張り御次男様を元子様のお婿様に」

「はい」

「そして貴女はごちら様で」

「妾は根井三木と申しまして、あの元子の伯母でございます」

竹枝はますく、驚を重ねて、私市家の近親にこんな競争者があ

つたのかと、俄に伏勢に取圍まれた思で、我が勝利を氣遣ふのだ、

今度は三木子から「貴女はごんな御用で」と問掛けた、

「は、はい、その、實は妾も……同じ縁談の事でね」

三木子は鋭い目を見据ゑて「おやッ、ぢやア矢張り私市へ、は、

左様ですか、貴女ッ」

竹枝はすでに怖氣付いて居る所へ、今また責められる如くに問

はれて、全で罪を糺されるやうな心持で「さ、左様なんでござい

ます」

「は、ア、ぢやア貴女が何んですね、飯田町の杉中の子息を世話

しやうと仰しやるんですね」

「はい、ついね、頼まれました」

「は、ア、それはまアお氣の毒な、妾の件と元子とは從兄弟同志
ですし、それに私市は妾の生家でもございまして、重縁の間柄で
すから、實は新に申入れませんでもね、妾の方の縁談は極つて居
るんでございませう、ですから貴女いくらお骨をお折りなすつても
必ず無効でございませうよ」

竹枝は言つて聞かされなくても、はや我が成功を……むしろ成
功金を危んで居るのだから、この嘲を帯びた詞が、敵ながらも道
理に聞爲されるので、折氣て長い溜息だ、

其 十

文平は頼に心を痛めながら、遂に私市の邸へ行つて、内玄關か
らすつと上つた、

當家の執事を井上佳作と言つて、岩丈な老人だ、玄關番の注進
に依つて、忽ち勘定場の外へ駈出し「これは富士見町様、もう御

全快遊ばしましてございますか」と手を突いて慇懃なものだ、
文平は立つたまゝ勘定場を見渡して、書記共の平伏するの答
禮しながら、詞は佳作へ「はい、度々見舞に來てくれて、大層心
配を掛けたが、まづお蔭で全快したよ」

「それは何よりお目出たうございます」
「私は今日は元子へ用があつて來たんだが、奥に居るだらうね」
「はい、お居間に居らつしやいますでございませうが、些私が見て参りませう」

「いや、それには及ばない、私が直に」と言流して、文平は奥の
元子の居間へ通つた、
元子は微の座を移して、糸の音色を調べて居たが「おや、叔父
様」と琴を押遣り、指の義爪を外しながら「お案じ申して居りま
したが、もうお風邪はお宜しいのでございませうか」
文平は例の和かに「むふ、もうこの通りだ」

末子は早速挨拶に來て、そして元子に並んで坐つた、
「元子、私はお前の縁談の事で來たんさ」

「おや」
「實は末子を分家させてからの事と、相談は極つて居るのだけれ
ど、丁度似合つた婿があるから、まづお前の身を堅めさせやうと
思つた所が、また外からも申込があつて、二人一時に突合つてね
私は大層困つて居るのさ」

「へい、左様でございますか、併し叔父様、二人と申しますと
「どちらもお前が識つて居る男だが、一人の方は、そら、飯田町
の杉中の小五郎さ」

元子は忽ち顔を赤めて俯向いた、
末子は姉の横顔を流目に見遣つて居る、
「それからもう一人と言ふのは、根井の芳也さ」
「あらッ」と元子は思はず口走つて、そして顯に眉を擡めた、

末子は脇から「あんな……あんな人、ねわ姉様」
「さうねわ、叔父様、妾はあんな……」
「それは叔父様、姉様がお可哀さうでございますよ、もう少し何な方なら何でもございませうけれど……ねわ」と言つて、末子はまた姉を見た、
元子は恰も無論と言ひた氣に頷いた、
文平も頷いて「さうだらう、私も最初からさう思つて居たんだけれど、根井の姉が故々見えて、是非と言はれるものだから、中途の計も出来難ねるので、取次いで見たやうな事さ」
「それに叔父様、妾はお妾ばかりで厭なんぢやアございませぬ、近親同志で結婚をいたしますと、馬鹿や片輪の子が出来易いと申しますから、一つはそれで……」
「そんな理屈もあるだらう、ぢやアお前は何か、小五郎の方なら貰ふ積か」

元子はまた赤面して、俯向いて黙つて了つた、
「叔父様、妾は能く存じて居りますの、あの方ならね、姉様はもう、餘程お嬉しいでございませうよ」
「さうか、それでは私の思惑の通りだが、併し困つたよ、小五郎の方は三原が言つて来たんだから、謝絶らうと思へば造作はないけれど、芳也の方は何分姉から直々の頼だし、それに私市家の相續は芳也に限ると極めて居られるのだから、ごうも謝絶り難ねるのさ、殊にもう支度に掛つて居られる様子だから、ますく謝絶り憎いのさ、あゝ困つた、何れ斯う言ふ協合になるだらうと思つては居ただけけれど」と文平は額を抑へて、途方に暮れた有様だ。
其十一
「子、文平の當惑顔を見て「叔父様はさぞお困りでございませうけれど、ごうぞ芳也様の方はお謝絶りなすつて下さいませい

くら伯母様のお望でも、餘り御道徳でございませぬ、ねね末子さん」
「さうですとも、平日からお氣強い伯母様ですけれど、だつてあんな人を押付けやうとなさるのには、づう／＼し過ぎますわね」
「さうさね、ですから叔父様、是非どうぞお謝絶り遊ばして下さいまし」

文平は目を閉ぢて考へながら「それは承知して居るのさ、だが困る、姉が受付けてくれられなからうから」

「ちやア叔父様も左様ぢやございませぬか、伯母様のお詞を、始めからお受け付け下さらなかつたら好かつたんでございませぬ」

「だつてさうは可ないさ、私の一存で、芳也は御免だとは言へないもの」

「さう仰しやればさうでございませぬけれど、妾はどうあつても厭でございませぬ」

「好いさ／＼、その事は分つて居るさ、たゞ私が謝絶るのに困る

と言ふだけで、話は極つて居るのだもの、併し念の爲に井上の輩見を聞いて見やう、些と此處へ呼んで下さい」

末子は小間使に命じて執事を呼ばせた、井上佳作は直に來て、次の間に平伏して「何か御用でございませぬか」

文平はたゞ双方の申込のみを話して、お前なら何れを取るかと腹藏のない意見を求めた、

「左様でございませぬ、私風情が彼是批評がましい事を申しては濟みませぬが、内幸町様の方は、法學士と申すお肩書がございませぬ、高官に就いて居らつしやるほどの御發明で、また杉中様の方は……能くは辨へませぬけれど、まづ通常の若紳士で居らつし

やいますから、御人物から申しますと、無論内幸町様の方が望ましいかと存じます、御當家の御相續を遊ばします方は、只

そればかりでも参りませぬか……是非御人品も御必要でござい

ます、其處になりすと、何分内幸町様の方は……あの通りの御
風采でございますから……」
「大きにさ、それゆゑ本人も芳也は厭だと言ふし、實は私もその
心だから、今此處では、小五郎の方を貰はうと言ふ事になつて居
るのさ」

「成程、それは至極お宜しいやうに存じます」

「む、お前も同意してくれるなら、いよ／＼それに内定して親
族會議を開く事にしやう、なに、親族の内では、芳也の兄が故障
をする位の事で、他家は必らず言ひなり次第だから、もう小五郎
に極つたも同様さ、だが井上、外に非常に困る事があるのだ、と
言ふのは、根井の隠居が宅へ見えて、返事を待つて居られるので
それへ謝絶を言ふのが私には辛いものさ」

「へ、それは成程御道理で」

「どうだらう、何か好い口實はあるまいか」

「はい……差當つて好い存じ付も……たゞ御本人様がお進み遊ば
さないからと……」

「だが是非とも芳也を貰はせやうと掛つて、大層熱心で居られる
のだから、それ位の事を言つたんでは、必ず承知してくれられま
いと思ふのさ」

「それも左様でございます、何分お勝氣な方でございますから」

「だから私は困るのさ」

「でも矢張り本統の事をお打明け遊ばしますより外には……」

「さうかね、成程、打明けけるより外はないね、だが困るよ」

文平はなほ困る／＼を言續けて居たが、遂に是非なく歸路に着
いた、

其十二

玉木の奥座敷に痿痹を切らして、文平の歸宅を待構へて居た兩

人は、襦の外へ足音の近付いて来るのを聞いて、等しく其方へ目を注いだ、

それは果して文平で、心配顔で襦を明けた、

三木子は忽ち膝を掛けて、「どうでしたか」

竹枝も續いて、「どうも御苦労様でございました」

「文平は力なく座に着いて、俯向いて獨言のやうに「道々も考へて来たんですけれど、お顔を見るとまた今更……」

文平さん、そんな前置は止して了つて、早く言つて下さいよ、

芳也に極つて居るとは言ひながら、聞けばこの方は杉中さんのお使ださうですから、何だか心に掛つて、二人で斯うして待つて居る間が、気が氣ちやアなかつたんですもの」

「ちやア直に申しませう、實はお二人をお並べ申して、その前で言ふのは變なものだと思ひますけれど、別席で申しましても、何れは知れる事ですから」

「さうですともさ」と三木子は嘲るやうに竹枝を見て「この方へはお氣の毒ですけれど、最初から芳也へ札が落ちるのだとは、分り切つて居る事ですからね」

「いな、姉様、それがさうぢやないんですから……」

三木子は忽ち大きやかな目を睨つて「何故ッ」

「實は本人の元子が、何分芳也は心に染まないからと申すのです」

「あら、心に染まないつて、へい」

竹枝はまづ安心のやうだけれど、小五郎をもまた心に染まないと言ひは爲ないかと、思はず唇を呑んで、文平の口の動き振を一心に見詰めて居る、

「姉様、私は芳也と杉中の子息との事を、どちらに片身恨もなく話した上で、元子の量見を聞いたんです、所が元子は、伯母様にも芳也様にも濟みませんけれど、何分進みませんからと、實に餘儀なく申すのです」

三木子は勢ひ凄まじく「そ、そんな馬鹿氣た事がありますか」と突掛るやうに言つた、
文平はびくりと爲て、身を反しながら目を屢叩いて「でも眞實さうなんで、宜しくお謝絶り申してくれろと……」
「いゝね、そんな事があるもんですか、お前さんの言ひやうが悪いからさ」

「なに、さうではないのですけれど、本人が明白に申すのですから、ごうか悪しからず御承知下さるやうに願ひます」

「だつてお前さん」と三木子は息を跳ませて言掛つたが、急に氣を變へて「併し杉中さんの方は」

「さア、其處がその……何だか當付けるやうに聞えますから、貴女へ申すのは辛いのですけれど、元子は豫て心があつた様子で、あの方なら異存はございませんと申すのです」

竹枝は横間から詞を挿んで「ぢやア玉木様、小五郎様に極りま

したのでございますか」

「左様です、改めて親類へ相談した上でなければ、表立つたお答は出来ませんけれど、何しろ本人が望んで居るのですから、實は

もう極つたのも同様です」

竹枝は先に弱り返つて居たいけに、その悦び方は格別で、多少

三木子へ見せ付ける心もあつて「あゝ、有難うございます」と勇み上つた、

三木子は獨り苦り切つて、何か考へて居る様だ、

「それでは玉木様、妾は早速お暇をいたしまして、この事を先方様へ傳へますでございます」

「ごうかさうなすつて下さい、色々お打合せの事は、追て御相談いたしますから」

「いね、文平さん、それは可ませんよ、もし貴女、お歸りなさるのはお待ち下さい」

文平は「でも姉様」と言ひながら、竹枝へそつと目で知らせた、竹枝はそれを幸ひに、逃げるやうに爲て行つて了つた。

其十三

後に三木子はますます、猛り出して「文平さん、お前さんは何故杉中の使を歸しました、いくら先方の肩を持つ積でも……」
文平は慌て、手を上げながら早口で「あ、姉様、私は杉中の肩を持つも何もありません、それは貴女の僻と言ふものですよ」
「いゝわ、僻なもんですか、お前さんの様子も變だし、またあの元子の量見方といふものも、から妾には分らない、目上の親類を蔑にして、何でもない他人の顔を立てるなんて、餘り踏付けた仕方ぢやありませんか」
文平は思ひ出したやうに勢ほひを得て「いゝわ、まだお話を爲さないで居ましたけれど、其處には仔細があるので、元子……」

顔は立てたい、よし他人は退けても、親類の望には従ひたいけれど、近親同志で婚禮をしては、馬鹿や片輪の子が出来から、是非なく謝絶ると申すので、實に無理ならん詞なんです」
「ほゝゝ、能くそんな好い加減な事が言はれたもんさ、ぢやア文平さん、私市から當家へ養子に來なすつたお前さんはどうですよ、矢張り従兄弟夫婦でせう、そしてお子が五人も有ますが、總領は郵船會社の重役が勤まつて行く位ですから、馬鹿でない事は極つて居ますし、後の女のお子だつてさ、みんな利口ぢやありませんか、そして五人が五人ながら、何處も片輪ではないのですから、元子の言ふのは嘘ですよ、そんな無理屈はないんですもの」
「いゝわ、何も必ずと申すのではありません、馬鹿や片輪がつい出來易いと申すのです、私が當家へ參つた頃は、誰もそんな事は言はない時代でしたけれど、追々研究を爲て、すでに盲歴學校でも調べたさうで、争はれない證據があると言ひますから、今では近

親の結婚を思ひのです、ですから成るべく避けなければ……私の方では僥倖に免れて居ますが、萬一申分のある子が出来たら、それこそ大變ですからねわ」

「なに、出来たら出来た時の事ですさ」

「そ、そ、そんな無法な事を仰しやつちやア……」

「無法は其方です、何でも杉中の方を謝絶らせて、芳也を貰はせるやうに爲て下さい、お前さんがその氣になつて、能く諭して下さつたら、元子はこの伯母に耻を掻かせるやうな事は爲ない筈なんさ」

文平はやゝ激して「ちやア私が悪いと仰しやるんですね」

「いい、さうは言ひませんけれど、芳也の方はどうでも好いと言ふお積だらうと思ふのです、ですから今度は何でもと言ふ心で、御苦勞序に、もう一度行つて下さいよ、ねわ」

文平は遂に投出して了つて「いい、それは御免です、私はもう

引下りませう」

三木子は例の目を光らせて「おや、何故」

「どうせ私では行届きませんから、御直々に行らしつて、貴女から元子へお話しなすつて下さい」

「あら、今更そんな事言つて下さつちやア困りますねわ」

「だつて元子の言ふ事は筋道が立つて居るんですもの、無理に強ひる事は私には出来ません、ですから是非貴女行らつして下さいまし」

三木子も斯う出られると、元子の心の動かし難いのが目に見ゆるやうで、或は失敗に了る事かと思ひ始めた、就いては負けない氣象だけに、自然痘病な心が出て、若も元子から直接に刻付けられたら、此上の耻辱だからと、どうしても自分が出掛ける氣にはなれないのだ、けれど、私市家の有福が念に残つて、見限る事も出来ないのです、何とか工夫はあるまいかと、暫くは無言で思案に

其十四

耽つて居たが、遂に苦しい考を思ひ浮べた。

三木子は故と爪を隠して「ぢやア文平さん、元子の事は思ひ切つて了ひませうよ、全く縁がないのでせうから」と更に他意のないやうに言つた、

文平は却つて意外の思で「わッ、ぢやア貴女、あの、御承知下さるんですか」

「だつて仕様がありませんもの」

「あゝ、それで私はやうく安心しました」

「ですが……元子の事は妾も諦めますし、芳也にも諦めさせますけれど、その代りに外の事なら、どうせ叶へて下さるでせうねわ」

「叶へますとも、外の事ならどんな御無理でも叶へます」

三木子は此處まで言はせて置いて、なほ「乾とですわ」と念を

押した、

文平はつい騙されて「それは必ず」と誓つて了つた、

三木子はもう占めたものだと、落付き澄まして「ねわ文平さん以前のお話では、あの末子の方を分家させてから、元子へ婿を取ると言ふ事でしたが、丁度好い縁があるといふので、元子の方を

先にしやうと言ふ積に爲なすつたのは、それは御道理ですけれどその爲に、末子の分家が延びるやうな事はありますまいねわ、姉

の婚禮が済み次第に、早速用意にお掛りでせうねわ」

「左様ですとも、すでに三番町の持地面の内場所で場所を選んで、借家人を立退かせて、長屋も取拂つてある位ですから、本家の婚禮が了ると直に、總體の建築に掛らせます」

「そして何でせう、末子の婿はまだ極つて居ないんでせう」

文平は始めて扱はと氣付いたが、すぐ襦げる嘘も言へないので「それはまだです」

三木子はぐつと頷いて「さうでせう、ぢやア丁度好いから、芳也を末子の婿に爲て下さいよ」

文平はいよ／＼胸を抱いたけれど、もう遅蒔だ、すでに誓はせられて居るのだから、義理にも厭が言へないのだ、それ故しおしぶ「どうあらうか存じませんが」と表切らない事を言つた、

「いわ、どうあらうかぢやアありません、是非今度こそは取持つて下さらなくつちや」

「でも本人の末子が何と言ひますか、それを聞いた上でない……」

「おや／＼、變な事をお言ひですわね、今お前さん、元子の外の事なら、どんな無理でも叶へると言つたぢやありませんか」

「そ、それは言ひましたけれど……人の心は分りませんからね」

「だつて後見人のお前さんが、本氣になつて勤めて下さつたら、末子は屹と承知しますよ」

「そんな譯に行くもんぢやアありません、いくら後見人の詞だつて、末子は聞きは爲ませんさ」

「おや、ぢやア末子が矢張り厭がつてゐも居て、そしてお前さんにはもう分つて居るのですわい」

實は文平には分つて居るのだ、加之も末子は元子よりはなほ芳也を嫌つて居る事は、前刻の口振で分り切つて居るのだ、けれどその事を漏しては、すぐまた攻掛けられさうだから「いわ、そんな事は」と一時逃れに鋒先を避けた、

「ね、さうでせう、末子までが妾の顔を潰しも爲ますまいから、今度は易く纏まるでせうよ」

「さうなれば宜しいが……」

「なりますともさ、妾はまた此處で待つて居ますからね、御苦勞序にすぐ行つて、ぢやんと話を極めて来て下さいな、私市といふ大身代の家へ養子に遣らうと思つて居たのを、妾は分家で承知し

やうと言ふのですから、お前さんもその積で、是非好い返事を持つて歸つて下さいよ」

文平は顔を皺めて「でも是非と申す譯には……」

三木子は忽ち怒りを見せて「あらッ、どんな事でも叶へると言つて置きながら……あれは嘘を言つたんですかッ」

文平は首を縮めて「そ、そんな事はないんですが、ちやア兎に角話し込んで見ませう」

「兎に角ちやありません、是非ともですよ」

其十五

文平は是非なく再び私市へ行つて、すつと末子の居間へ通つた、末子は机の前に座つて、手に洋書を捧げながら、低聲に復習を爲して居たが「おや、叔父様」と言ひつゝそれを机へ伏せた、打遣つては置けない用「勉強中に邪魔を爲しては濟まないけれど

が出来たのさ、それで私は困つて居るので」

「あら、叔父様はまた困るご仰しやいますよ」

「成程、口癖にまでなつたと見える、今日は何といふ悪日だから……末子、一つ免れてまた一つで、元子の方をやうく姉に得心して貰ふと、今度はお前へ劔先が向いて来たんさ」

「おや、妾へ、それはどんな事でございます」

「また同じ難題さ、姉は元子と小五郎との縁談は承知するから、芳也を分家の養子に……末子の婿に爲てくれろと言はれるのでね」

末子のはつと色を變へて「あらッ、まアそんなでもない事を」

「さうだらう、驚くのも無理はないけれど、實にもう私も進退のならない場合になつて居るので、進まないながら話しに来たやうな譯さ」

末子の顔は忽ち血の氣を帯びて来て、詞も強く「だつて叔父様左様な事は妾は厭でございます、どうぞ直様お謝絶りなすつて下

さいまし」ときつぱり言つた、

「それは道理だ、けれど私はまことに辛いのだから、どうか聞入れて貰ひたいのだが……」

「おや、ちやア今度は叔父様からもお頼み遊ばすのでございますか」

文平はこの様子では脈があると思つたか「む、む」と続け様に頷いて掛つて「さうさ、私からも頼むのさ、だからどうか承知してくれろ、ね、これ」と顔を覗いた、

末子は掛酌なく頭を掉つて「いい、厭でございませう、また餘りでございませうね、先刻の姉様の時には、たい取次ぐだけだお仰しやつた限で、少しもお勤め遊ばさなかつたちやございませう、それに何故妾には、貴君からまでお頼みなさるのでございませう、妹だ、構はない、無理押付にと……どうせさう言ふお積でございませう」と一氣呵成に言つて退けて「妾は姉様に聞いて貰ひませう、

これ、春、姉様に些と入らしつて下さいませう」と大聲で命じ

た、二間隔てた部屋に居た小間使のお春は、聞くより早く廊下へ出

て、ばたくと駈出した、

元子は早速出て来て、文平へ挨拶を爲掛けた、

末子は直に横間から「姉様々々、まア聞いて下さいませ、今度

は芳也様を妾に貰へど仰しやつて、叔父様までがお勤め遊ばすの

ですもの」

「おや、ちやア妾が厭だと言つたもんだから」

「さうなんですよ」

「元子、全くそれもあるんだがね、私は姉に誓つた詞があるもん

だから、どうあつても末子に承知して貰はなければ……」

末子はまた横間から「だつて叔父様、芳也様と姉様とが御近親

なら、妾とも近親でございませうよ」

「それも私が言つたんだけれど、姉が承知してくれられないのだ」「いくら叔母様が御不承知でも、妾も不承知でございませう、それとも叔父様は、この妾になら、馬鹿や片輪の子を産ませても好いと思召すのでございませうか」
文平は泣かないばかりに顔を皺めて「さう言はれると一言もな
いけれど……元子、たい見えて居ないで、お前からも能く言つて勤
めてくれろ」

「はい、ちやア末子さん、叔父様があんなに仰やるから……」
末子は忽ち立腹して、姉の詞を中途で遮り「いわ、姉様、些
貴女御自分でも厭な芳也様ぢやありませんか、それを何故妾へ勤
めます、餘り思ひ遣がなさ過ぎませうよ」
「だつて叔父様が大層お困りの御様子だからさ」
末子はますく立腹して「ちやア小五郎様と取換事しませうよ
芳也様は矢張り貴女お貰ひなさい、それが好いのさ」

其十六

元子はたい罵られてのみは居ない、すぐ口を反して「末子さん
小五郎様はね、もう妾とお話が極つて了つて居るんですからねね
ほ、お氣の毒様」
末子も、たい嘲られては居ないで「姉様も御心配は御無用になさ
いますし、ほんとに小五郎様を取る氣で言つたんぢやアありません
から」
「知れた事です、お前さんなんぞには過ぎませう、芳也様で丁度
好いのさ」
「おや、そんな事をお言ひですなら、妾は小五郎様を取つて見せ
ますよ」
文平は苦々し氣に顔を皺めて「これく、もう止さないか、冗
談でもそんな冗談は可ない、全體お前達は口が過ぎる、それで大

所のお嬢様と謂はれるか、少しは身分を考へて、互に控へ目に爲てくれなければ困るよ」

「だつて姉様は不人情でございますからね」

「おや、何故妾が不人情なの」

「はゝ又か、もう好い加減にするが好い、そんな事よりは肝腎の芳也の方だが、末子、厭ではあらうが聞入れて貰はなくうちや」

「でも姉様があんな事を仰しやつていすし……」

「なに、今のは戯さ、そんな一時の事を根に持つては可ない」

「いね、そればかりで申すのではございませぬ、芳也様は元から蟲が好かないのでございますから、此上無理に勤められましたら妾は病氣が出ます、ですからどうぞ助けると思召して、この事はかりは御勘辨下さいまし、ねね叔父様、是非どうぞ……御請でございますから」

と末子は遂に手を突いて頼むのだ、

氣の弱い文平は、今はもう強ひる事が出来なくなつた、けれど

姉へ言譯の術がないから、親しく末子に逢はせて我を折らせやうと、書記を呼んで旨を授け、たい來てくれるとのみ言へと命じて當家の馬車で迎へさせた、

三木子は事が調つたものと察したので、いそぐ出て來た、

「姉様、末子も矢張り心に染まないと申して、どうしても承知しません、私は貴女へ申譯がないからと、熱心に説付けたんですけれど」

「おや、妾は承知したから呼びに來たんだと思つたのに、まアそりやア何と言ふ間の抜けた事ですよ」

「でも私の力に餘りますから、直々逢つて頂いて、貴女から改めてお勤めなさるとも、またお見限りなさるとも、お心任せに爲て貰はうと思ひましたね」

「詰らない、ぢやア末子、お前も矢張り妾の顔をお潰しなんだね」

末子は叔父には打解けて居るので、多少甘へる所もあつて、言

ひたい事も言ふのだけれど、この伯母には常から恐れて居るのだから、たい一言の返辭も爲難ねて黙つて居る、

三木子はじろりと元子を見ながら「先刻は姉の方が耻を掻かせたのに、今またお前までが耻を掻かせるのは餘りだよ、どうせお前達は面喰で、馬鹿でも生いやらしい男が好いのだらうが、立派に物の出来る芳也の嫁になつて置いたら、自分の身にも箔が付くのだから、爲を思つたら厭だとは言へない筈さ、ねね、さうぢやアないか、末子、どうだいお前」

末子は小聲で何か言つたやうだ、

「ね、何、何とお言ひだよ、これ、厭なら厭と言つて見なッ」

末子は鋭い詞に怖へて、また黙つて了つた、

「これ、どうだい」と三木子は烈しく詰寄せた、

末子は冷りとして一膝退つて「ぢやアもう仕様がございませぬ」

「成程、仕様がなから、そして、承知するとお言ひなんだね」

其十七

末子はほろりと涙を溢しながら頷いた、

「文平さん、元子お前も今のをお見だつたらうねね、末子は承知しましたよ、萬一後になつてから彼是言出した時は、お前さん達が證據人だから、この事を忘れないで居て下さいよ」

三木子は怖い伯母の威光で、無理往生に末子を領かせた勢に乗じて「ねね末子、芳也は當月中に洋行をするので、大層婚禮を急ぐのだが、何日に爲たら……」

末子は狼狽へて詞を遮り「いね、伯母様、そんな、そんな急な事を仰しやつては困ります」と恐る／＼故障を入れた、

「おや、お前承知した上は、早くつても遅くつても同じ事ぢやアないか、何故急では困るとお言ひだよ」

末子には何故と取止めた事はないのだ、たゞ一時逃の心で、何

日までもぐづくに延して居たいのだから、返答に感いて「それは何でございませぬ、その、あの……」とあやふやな事を言ふ間に不圖旨い口實を考へ浮べて「何故と申しますと、まだ自分の家もございませぬのに、婚禮いたしますのも變なものでございませぬから、どうぞ分家の普請が出来上つてからになすつて下さいまし」と言つて退けた。

「ほへへ、伸氣な事をお言ひだね、お前の分家になる彼處の塙所は、今も通つて見て来たが、荒果てたまゝの原ぢやアないか、急に普請に掛るに爲ても、まだ木積も出来ない内に、芳也が出發する事になるもの、ね、だから婚禮はこの家で爲たら好いのさ、それだとお前よしんば暫くの間でも、夫婦が一所に暮して居られるのだから。」

末子は今は動かない、一心に新口實に縫り付いて「でも妾が獨身の間は、何日まで此處に居りましても宜しうございませぬ、この

家は妾の生れた家でございませぬから、けれど婚禮を爲てからまで居りますと、如様の厄介人のやうな心持がいたしまして、自然氣兼でございませぬから。」

「何だか厭に高慢な事をお言ひだね、ぢやア何處かで賈い貸家を見付けて、婚禮を其處で爲て、そして分家が出来上るまでの所は、假にその家に住んで居るといふ事に爲たら好いだらう。」

「そんな、そんな不自由らしい、一生家が持てないのなら何でございませぬけれど、何れ新規に建てるのでございませぬから、自分の家で婚禮を爲て、そしてその家に住みたうございませぬ。」

三木子は怒り易い性だから、遂に指癢に觸へたけれど、今もし末子に逆らつて、また縁談の不承知を言はれては大變だからと、蟲を抑へて「ぢやア末子、本統の婚禮は分家が出来てからの事と極めて、今の所は内祝言を爲て置く事に、ね、それが好いだらう。」

「そんな、そんな……」

「おや、お前またそんなかい」

「だつてそんな内証のやうな事は厭でございますわ、芳也様か御歸朝をなすつたら、立派に表立つて出来るのでございませうもの」

「三木子は遂に持餘して「妾は洋行までに済ませやうと思つて居るんだのに、そんな勝手な事はかり言つてくれば困るよ、ねね文平さん」

「いね、それは姉様、末子の言ふやうになさる方が好いでせう、分家の建築を急に取り掛りましたら一年間で落成するだらうと思ひます、丁度その頃には芳也も歸つて來るですから、婚禮はその時もあるくといふ事にねね」

「なに、そりやアさう爲ても好いのですけれど、このまゝで日が経つと言ふと、末子の心が變りは爲なからうかと……それが妾は心配なもんですから」

「そんな事はありますまいよ、あの通り一旦承知したんですもの」
三木子は暫く考へて「さうでせうかねね」
「さうですとも」
「ぢやアア安心して、妾はお暇ませうよ、それでは文平さん大きにお世話を掛けました、何れまた打合せに富士見町の方へ行きます、末子、お前言つた事を間違へておくれでないよ」と言ひながら立上つて「元子、お前の婚禮には妾は來ないからね、今から斷つて置くよ」

其十八

小五郎は頗りに婚期を急ぎ立て、一旦は競争者であつた芳也のまだ海外へ出發を爲さない間に、早くも私市家へ乗込んで、深く望を掛けて居た元子と、目出たく合歡の杯を擧げた、その得意想ふ

べしだ、竹枝も得意だ、小五郎から悦を頼られて、豫約の成功金が手に入つたのだから、どうせ預け付の銀行へ取付けた事だらう、元子も言ふまでもなく得意だ、豫て自分からも意のあつた小五郎を、首尾好く夫に爲たのでもあり、ことに妹が取つて見せるなごと言つた事さへあるのだから、彼へ當付ける心もあつて、早速髪を丸髷に結改め、夫婦睦まじい處を見せて、へん、どうだ、と言つたやうに振舞ふのだ、

末子は失意の頂上だ、貧乏圖を引いたのは當人ばかりで、たゞさへ芳也の事で氣を腐らして居る處へ、姉の仕向が是だから、酷く業を煮やして居るので、

「お嬢様、大層お静でございませぬね」

末子は居間で脇息に凭れて、頸に思案に耽つて居たが、屈託顔を上上げて後を見返り「春かい、好いからお入りな」

「はい」と答へて襖を引明け、軒かに入つて来たのは、氣に入りの小間使、惚々として末子を見ながら「斯う申しましては何でございませぬ、只今までのお束髪よりは、矢張りお島田の方がお宜しうございませぬね、貴女がさうして居らつしやいませぬ、なほなほお美しうございませぬよ」

末子は高島田の一の邊を撫でながら「姉様が髷になすつたもんだから、妾は初めて是に結つて見たけれど、十四五から束髪でばかり居たもんだからね、何だか馬鹿に重くつてさ」と忙しく頭を撞つて試て居る、

「それは左様でございませうけれど、能くお似合ひ遊ばしますよまたあのお庄さんは上手でございませぬからね」

「どうだか、姉様のを結ひに来るもんだから、妾も頼んで見たんだけれど」

「もうあの人に極めてお了ひ遊ばしませぬ、能く出来てございませぬよ」

もの

「さう、妾は遊ばうかと思ふのだけれど」

「あら、お殿し遊ばすのは惜しいぢやアございませんか、それに明日は何でございませう、内幸町様の若様が御出發なさるんでございませう、ございませう、内幸町様の若様が御出發なさるんでございませう、また外の髪結をと仰しやいましたも、お庄さんより上手な人はございませんし、ございまして、明日のお間には合ひませんでございませうよ」

「いね、妾は見送りは爲ないの」

「だつてそれではお悪うございませう、横濱へは行らつしやいませんでも、せめて新橋まではお送り遊ばしませんで」

「なに、どうせ家の兄様が行らつしやるだらうから、妾は病氣だとか何とか言つて、断つて置いて貰ふさ」

「おや、左様な御他人がましい、今では貴女のお許嫁ぢやアござ

いませんか」

「許嫁か何か知らないけれど、妾は何日になつても婚禮は爲ない積り、一年経つて御歸朝なすつたつて、分家の家が建上つたつて誰がまたあんな人と……」

「それは御無理もございません、何分お醜い方でございますから……」

末子は醜いと聞いて思ひ出したか、急に顔を皺めて「春、これ、もうあの人の話は止しておくれな、御請だからさ」

「おや、また大層お憎いと見へますねわ」

「なに、たい嫌なばかりで、憎い事は少しもないの、憎いのは姉様さ、仕打が餘り思々しいから、妾は何でも目に物を見せやうと思つて……」

其十九

分家の普請はすでに着手して居るのだが、幾棟にも分れた大建築の事だから、中々工事が捗取らない、今朝になつてから始めて邪許の聲が爲て、本家に居ても手に取るやうに聞え出した、やうやう地堅に掛つたらしい、

末子は我が家の普請が捗取らうが捗取るまいが、そんな事は無頓着で、只管姉を憎んで居たが、もう此頃では、姉を見れば異様の嘲を帯びて、ひそかに勝鬨を揚げて居るのだ、

元子は最初は得意氣に振舞つて居たが、日を経ることに折氣形で、ともすると首を傾げる、目を側る、少しの間も安い心はない様だ、

小五郎は妻とは全く反對で、胸中の満悦が抑へ切れないと見へて、人に對しても獨で居ても、にこくと笑つてばかり居るのだ、今も溢れるやうな笑顔で、庭下駄を突掛けて、泉水や築山の間を逍遙いて居たが、やがて末子の居間の庭先へ回つて行つた、

すると内から障子が明いて、同じやうに笑を含んだ顔が見えた

「末子さん、何を爲て居ますね」

「待つて居ましたの」

「焼芋でも買ひに遣つて、その来るのを待つてるんですね、意地の汚い」

末子は何も言はないで、俯向いて肩で笑つた、

「どうです、ぐつと胸に應へましたか、能く當つたでせう、厚にお手の筋を見て上げませう」と言ひながら、小五郎はすつと傍へ寄つて行つた、

末子は自分が敷いて居た座蒲團を取つて、客座の方へ押遣つて小五郎の上つて来るのを待構へて居る、

「いや、私は此處で澤山です」と小五郎は條側へ腰を掛けた、

「兄様、其處ちやア貴君」

「なに、もし人から厭な嫌疑でも受けては詰りませんからね」

「それも左様ですけれど、何も嫌疑をお受けなさるやうな事はな
 いちやアございませんか」
 「だつて李下の冠といふ臂もありますもの、誰か意地の悪い奴か
 ら、英國の芳也君へ告げられでも爲て御覽なさい」
 末子は忽ち眉を皺めて「また貴君厭がらせを仰しやいますよ」
 「でも告げられたら大變ですもの」
 「もう好いちやございませんか、そんな事を仰しやる手間で、早
 くお上りなさいましよ」
 「いや、この方が勝手です」
 「あら、そんなに貴君は姉様がお怖いの」
 「さういふ譯ちやアありませんがね、好んで變に思はれるでもな
 いからさ」
 「ちやア姉様は何を爲て」
 「何を爲て居ますか……下女共と話してゐる居るんでせう」

「そんなら好いちやアありませんか、些とお上り下さいましな、
 お話があるんですからさ」
 「お話なら其處から言つて下さいよ」
 「ちやア此處から申しますが……」
 元子は夫に用があつて居間へ行つたが、居る筈のが居ないので
 例の首を傾げて、見ることもなく沓脱石へ目を遣ると、庭下駄が見
 ないから、はつと心付いた様子で、足はす妹の居間の方を覗む
 とそのまゝ、足の音を盗みつゝ走り付けて、鏡の手なりの廊下の
 隅へ立止つたが、二人の話し聲が聞けたので、忽ち嫉妬の炎を燃
 して「何を言つてるんですよッ」と叫びながら、勢ひ鋭く居間の
 中へ飛込んだ、

其二十

縁側に居た小五郎は、妻の怒り聲に驚いて、色を變へつゝ逃腰

だ、末子は却つて我が傍へ躍り込まれながら、泰然自若たるもので姉を見上げて嘲ら笑つた、

元子は立ちほだかつたまゝ兩人を見較べて、酷く息を跳ませつゝ「貴夫、どういふ御用でこんな所へ入らつしやつたんでございませ、また末子さんも末子さんさ、なせお前さんは妾の目を盗んで、不都合な事をお為なの」

「あら、姉様、何が不都合ですよ」

「だつて變なもの」

「變な事は少しもありません、たゞお話を爲て居たんです」

「お話なんぞ爲ないたつて好いのさ」

「そんな譯に行くもんですか、同じ家に居る方ですもの」

「ちやアごんなお話」

「たゞの世間話を爲て居たんです」

「いゝね、それは嘘さ、變な事があるに相違ないのさ」

「ほゝ、兄様は彼處に腰を掛けて居らつしやいますし、妾は斯うして机に凭れて居たんですもの、お話をするより外に、何も出ないちやアありませんか」

「そりやア今はさうだつたかも知れないけれど、今日までに何度も變な事があつたんですよ、妾は見た事があるのさ」

末子は澄まして首を擡つて「いゝね、決して」

元子はいよゝ憤つて「そ、そんな白々しい事が、能く、い、い、言はれたッ」とまでは言つたが、舌が鈍れるのが言止んで、手足をびりゝと顫はせた、

末子はますます澄まし返つて「言はれる筈さ、その通りですもの」

「まだ、まだそんな……もう今日と言ふ今日は……」

「おや、今日といふ今日は、そして、どうしやうと仰しやるの」

「はッ、惜い口ッ、まづその口から」と手を差伸べてすつと寄る、

末子は素早く身を躲した、

元子はその機にすんと倒れて、爲に一入逆上したか、今は前後不覺の體で「どうするか見て居な」と言ふと共に、ばたくと廊下の方へ、

「はッ、何をやる積でせう、ねね兄様」

小五郎は妻の走つて行く方を見詰めたが、「何をやる積だか……まア何しろ詰らない事になりましてね、あッ大變、大變な物を持つて」と膽を潰して椽側へ飛上つた、

元子は夫の居間から短銃を取つて來たので、はや此處へ近付いて來た、

小五郎は狼狽へながら道を塞いで、妻の右の手首を捕へ「途方もない事を、そんな無法なッ」

「いわ、お離し下さい」

小五郎は早口に「可ない、末子さん、お逃げなさい、險呑だ」と言ひながら、力に任せて短銃を奪取つた、

「貴夫はさうでせう、末子さんをお庇蔭ひなさるのが宜しいのさ末子さん、御夫婦ですから」

「そんな馬鹿な事を言つては困る」

「いッ、妾は捨てられたんでございませう、口惜しい、口惜しいッ」と元子は抑へ付けるやうに叫んで、そのまゝ泣伏して了つたが、やがて後を見返つて大聲で「これ、松、定、誰でも好い、馬車の支度をさせておくれな」

「元子、お前何處へ」

「何處へでも好うございます」と言捨て、元子は衣紋の亂れたのも無頓着で、裾もほらく駈出して行つた、

其二十一

小五郎は妻の後姿を憎々し氣に見送つて居たが、やがて末子の居間へ入つて「全で狂人のやうだ、末子さん、然子は何處へ行つたんでせう」

末子は深く氣遣ふ様子で「玉木の叔父様へ言告けに行らしたんでせう、外には何處も心當がありませんから、屹とさうでせう」

「はア、玉木さんへ、そりやア飛んだ事だ」

「ほんとに飛んだ事になりましたのね、實は妾は姉様に意地がありましたね、つい貴君に御迷惑を掛けるやうな事を爲ましたけれど、こんな大事にならうとは思ひませんでしたの、今叔父様のお耳へ入る事になりますと、妾はもうこのまゝ無事には居られなすまい」と先刻姉に楯を付いた勢は掻消れて、末子は酷く情氣返つて了つた、

小五郎はまた先刻の憶病とは打つて換つて「なにどうなるもんですか、私は覺られないやうにとばかり思つて、それを心配して居たもんですから、不意に元子に踏込まれた時は、非常に驚きましたけれど、もう斯うなつたら是非がありません」

「でも妾は姉様の仕向が忌々しいもんですから、陰で笑つて遣ります積で、貴君とお親しくなつたんですけれど、もし遠慮けられるやうな事になりましたら、却つて姉様の方から笑はれるのですから、それが妾は口惜しくつて……」

「いね、御心配はありません、一時二人の中を隔てられる事があるかも知れませんが、末子さん、私は決して貴女を捨てませんよ」

「おや、妾を其處までに思つて居て……」

「思つて居ますとも、よし元子は捨てても、貴女は決して捨てません」

「それはお口先だけでせう」

「いね、御安心なさい、私は元子に愛想を盡しましたからね、ご申すのは、今の短銃騒いで、そりやア自分の夫を取られたんだから、腹は立ちませうさ。だつて飛道具を持出すのは餘りです、私はあゝ恐ろしい女だと思つて、たゞそれだけでも呆れて了つたんですのに、その飛道具を取上げられたからと言つて、すぐ叔父様のお宅へ喋りに行くなんて、所作が女らしくありませんから、私は呆れた上にもまた呆れて、すつかり厭氣になりました、だから元子との間はごうなつても宜しい、たゞ貴女のお力にならうと思ふのです、今も申した通り、一時は二人の中を隔てられるかも知れませんが、私は隔てられたまゝには爲て置きません」

「左様ですか、それなら妾も安心です、今の所は姉様に笑はれましても……」

「さうですとも、また笑ひ返して遣る時節がありますさ」

「さうさへなりましたら、妾は何も思ふ事はございませぬ」

「だから末子さん、貴女も度胸をお据ゑなさい、今に元子が叔父様を引張つて来るでせうが、来たら二人は結ばれます、その時はもう隠しませんから、貴女も打明けて言つてお了ひなさいよ」

「おや、その方が宜しいでせうか、妾は叔父様に極が悪うございませうから、さうと察しられて居ましても、覺のない事だと申す積ですけれど」

「いね、隠さない方が後の爲です」

「ぢやア妾も量見を極めますけれど、兄様、もう叔父様が見ねるかも知れませんか、貴君お居間へ歸つて居て下さいましな」

「はゝゝ、厭に人を追立てますね」と言ひながら、小五郎はまた庭から歸つて行つた、

其二十三

元子はたゞ一人で歸つて来たが、その意氣は頗る盛んで、すつ

と妹の居間へ行つて「末子さん、叔父様の仰です」全で御上意だ
 頭が高いと言ひた氣に座を構へた、
 末子は果してと思つたが、直接に文平か来ないのと、小五郎に
 腰を押されて居るのとで、どうして、頭を下げるどころか、身を
 反して睨みながら「矢張り富士見町へ行らしつたの、意地の悪い
 姉様ですから、屹とさうだらうと思つて居たんです」
 元子はこの悪口に頓着なく、我が詞の後を繼いで「お前さん直
 に富士見町へ行つて下さい」
 「おや、何の用で参るのです」
 「だから叔父様の仰だと言つてるぢやアありませんか、叔父様が
 直に寄越せと仰しやるんだから、お前さんは何も文句を言はない
 で、行さへ爲たら好いのです」
 この時小五郎が入つて来て「元子、お前は玉木様へ行つたのか」
 「はい、ですが此處へは貴夫がお出なさる暮ぢやアありませんか」

ら、どうぞ彼方へ」
 「まアそんな事を言はないで、お前は何れこの二人の事を告げに
 行つたんだらうが、叔父様は何と言つて居なすつたね」
 「分つて居るぢやございませんか、まさかお褒めなさりも爲ませ
 んさ」
 小五郎は顯に舌打を爲て「そんな事を聞いちやア居ない、叔父
 様がどう爲ると仰しやつたか、それを聞かうと言ふのさ」
 「その事をお打明け申しますと、貴夫にお氣の毒でございますけ
 れど、そんな不埒な者同志を一所には置けないから、末子は當分
 私が見る、直に寄越せと仰しやいました、はい、もうお逢引が
 出来なくなりますから、さぞまアお力落しでございませう」
 「そ、そんな厭味を言はなくつても好い、私は強ひて末子さんを
 引止めて置かうとは言はないし、末子さんもさうだらう、お前に
 恨まれたながら此處に居たくはないだらうさ、ねね末子さん」

末子は何とも言難ねて黙つて居る、
「だが困るよ」

「ほ、元子、重々お察し申して居ります」

「あ、元子、お前は直それだ、ちき厭味を言ふから可ない、私は何も未練な心で言ふのぢやアないよ、今急に玉木様へ預けると、これは變だと言つて、人が不審するだらうから……」

「そりやア左様でせうよ、人に不審されるやうな事をなすつたんでございますから」

「まア黙つて聞きな、こんな事はなるべく氣取られないやうに爲て、始末を付けて了はなければ、外聞に拘るから、不審もされず外聞にも拘らない家を選んで、其處へ末子さんを預けるに限るさ」

「そんな十分な所があるもんですか」

「いや、有るよ、英語の教師の三原の家が丁度好いのさ、あの教師は毎日教へに来て居るけれど、それ位では進歩が見れないから」

「な、變に思つたつて好いちやアございませんか」

「いや、元子、私は末子さんを庇陰つて言ふのぢやないよ、お前の爲にもその方が好いのさ、もし末子さんが世間で誹られたら、姉のお前も不面目だらうぢやないか、ね、さうだらう」

「言へばまア左様なものでございませぬけれど」

「だから三原に極めるさ、末子さんを預けてさへ了へば、お前が済むので、家は何處でも構はないのだから、さうする方が無難で好いよ」

頭つて修行の出来るやうに、寄宿すると言ふ事に爲て、彼處へ預けるのが一番だよ、世間では却つて感心する方で、少しも變には思はない」

「な、變に思つたつて好いちやアございませんか」

「いや、元子、私は末子さんを庇陰つて言ふのぢやないよ、お前の爲にもその方が好いのさ、もし末子さんが世間で誹られたら、姉のお前も不面目だらうぢやないか、ね、さうだらう」

「言へばまア左様なものでございませぬけれど」

「だから三原に極めるさ、末子さんを預けてさへ了へば、お前が済むので、家は何處でも構はないのだから、さうする方が無難で好いよ」

頭つて修行の出来るやうに、寄宿すると言ふ事に爲て、彼處へ預けるのが一番だよ、世間では却つて感心する方で、少しも變には思はない」

「な、變に思つたつて好いちやアございませんか」

「いや、元子、私は末子さんを庇陰つて言ふのぢやないよ、お前の爲にもその方が好いのさ、もし末子さんが世間で誹られたら、姉のお前も不面目だらうぢやないか、ね、さうだらう」

「言へばまア左様なものでございませぬけれど」

「だから三原に極めるさ、末子さんを預けてさへ了へば、お前が済むので、家は何處でも構はないのだから、さうする方が無難で好いよ」

頭つて修行の出来るやうに、寄宿すると言ふ事に爲て、彼處へ預けるのが一番だよ、世間では却つて感心する方で、少しも變には思はない」

「な、變に思つたつて好いちやアございませんか」

「いや、元子、私は末子さんを庇陰つて言ふのぢやないよ、お前の爲にもその方が好いのさ、もし末子さんが世間で誹られたら、姉のお前も不面目だらうぢやないか、ね、さうだらう」

其二十三

元子の心中は小五郎の推察通りで、末子を外へ出しさへすれば

好いのだ、叔父の家でも何處の家でも選ばないけれど、夫は三原竹枝とは心安いから、その家へ妹を預けるのは險呑だ、夫が逢ひに行くかも知れないと思ふので、何とも答へ難ねて居る、

小五郎はなほ世間の思惑といふのを口實にして、弛まず機ます説立てた、

元子は遂にその氣になつて「ぢやアそれでも宜しうございませう、叔父様さへ御承知なら」と言出した、

「なに、叔父様もお前と同様で、末子さんを當家に置かなければそれで好いのだ、必ず私の方へと仰しやりは爲ない、だから明日でもまた富士見町へ行つて、外聞を厭ひますから、英語の教師の家へ預けますと、お前から言つて下さい、三原の方は早速私が頼みに行かう、だが今頃行つても居るか知ら、末子さん、もう稽古に来ましたか」

「はい、餘程先刻でございました」

「ぢやア歸宅して居るだらう、併し末子さん、貴女寄宿に行くのを承知ですね」

元子は忽ち横間から「不承知は妾が申させません、もう一日も此處には置かないのぞございます」

末子は目を側て、姉の顔をきつと見た、

「元子、さう言つては角が立つ、お前はもう黙つて居な、ぢやア末子さん、私はその事に極めて來ますよ」

小五郎はやがて二頭立の馬車を驅つて、山王下の三原の家を訪れた、

竹枝は折好く在宅して、彼の飾り立てた奥の間へ通して、例の追従に口敷を費すのだ、

「三原さん、今日は御迷惑な事をお頼みに來たんです、當分の間ですが、末子を此方へ寄宿させて下さいませんか」

「おや、何故でございます」

「お聞入が出来ませうか、寄宿料は十分に差上げますよ」
「そりやア御相談に依りましては……丁度明いた間もございませうし、妾の方は構ひませんとも、併し斯様な汚らしい家でございませうから、お嬢様が御幸棒は出来ませうまいよ」
「いや、本人は承知して居るんですから、その御懇念は御無用です」

「ちやア何日からでも、でございますが、何故また俄に左様な事を遊ばしますので」
「少し鍵が出来ましてね、今も宅で夫婦喧嘩や姉妹喧嘩を遣つたんです」

「へい、それはどういふ……」
小五郎はにつと笑つて「仔細を貴女に打明けたら、だから言はない事ぢやアないぞ、一口に叱られる一件でね」
竹枝も笑つて頷いて「なる程、ちやア矢張り御姉妹様が克く

似て居らつしやいますから、貴君がお間違へなすつたと申す譯で、と顔を覗きながら抑へ付けて「でございますませう」
「全く」

「おほムムム、ちやア貴君は奥様にお隠しなすつて、折々此處へ遊びに来やうと仰しやるんでございませうね」
「まアそんなものです」

「罪でございませうね、茲は奥様へ申譯がございませんわ」
「三原さん、そんな野暮な事を言つちやア困る、全體なら玉木へ預ける筈なんですが、彼處ではた顔を見に行く事も出来難ねる當家ならその自由が利くと思ふから、家内の不承知を無理に説付けて、やうく此處へと言ふ事に爲たんです、始終遊びに来られないやうな家へなら、誰が顔みに来ますもんかね」
「おや、恐れ入りました、それでは私市様妾は語學の教師兼待合の女將でございませうね、おほムムム」

其二十四

末子は遂に三原の家へ預けられた、だが少しも萎れては居なかつた、内々小五郎と打合せてあつて、家で姉の目を忍びながら逢ふよりは、却つて氣兼ねなく逢はれると思ふからだ、

小五郎は直にも踵を逐ひたいのだが、さうは問屋で御まない、あれ以來は始終妻に附纏はれ通して、些と紙入を懐中へ入れても貴君何處へと糺明される、餘り御無沙汰を爲て居るから、玉木様へと言拵へると、ちやア妾も御一所に参りませう、と斯う來られる、

楓井様へ芳也君の不在見舞に、ちやア妾も御一所に、ぶらぶら散歩を、ちやア妾も、と一人では決して出してくれない、これなら真逆と、久し振で西洋料理を喰べにと言つても、矢張り御一所に参りませうだから、逢ひに行く時機といふものが更に無い、それも心大當外れで、飛立つ思を抑へながら、つい半月ほど

も空しく過した、

今も妻の監視を受けつゝ、籠鳥の歎に堪へない所へ、お松といふ小間使が郵便を持って來たので、何心なく受取ると、竹枝から出した封書だから、はてね、あの怨深から手紙を寄越す用はない、これは必ず末子からの呼出状だらう、折の悪い時に來たものだ、我知らず眉を蹙めた、

元子は鏡い目で見遣つて「それは誰から参りましたの、女の手ちやアございませんか」

小五郎ははつとは思つたが、平氣の體で「その筈さ、三原から寄越したんだもの」

「あの人からどんな御用でございます」

「なに、寄宿料をもう少し増してくれろとか言つて居たから、どうせその用だらう、詰らない」と直に開封したい手紙を、故らに投出した、

元子はそれを猶豫なく取上げて、全て検閲でもするやうに、表裏を覆して仔細に見た上で「中を御覽なさいました」と突付けた、「なアに、見ないでも分つて居るさ」

「だつてまた末子さんに何か變つた事でもあつて、知らせて參つたんかも知れませんかよ」

「そんな事があれば、別使を寄越すだらうさ」

「ちやア御覽なさらないの、このまゝ反古にしても宜しいので」と取捨てるやうな風を見せた、

小五郎は慌てゝ手を伸して「いや、先方へ返事の都合もあるから」

「ちやア只今御覽なさいましたな」

「でも心持が悪くつて面倒だから、また後で見やうよ」

「ほゝゝ、何だか變でございませぬわ、實は妾も見せて頂きたいのでございませぬか……」

「な、なせお前はこの手紙を見たいのだ」

元子はやゝ嘲笑を帯びて「このお名前もお手も三原さんでございませぬけれど、中は末子さんでせうと存じますからさ」

「そんな事があるもんか、今はもう無関係になつて居るのだもの人の名前を借りて、私へ内証の手紙を寄越す譯がないさ」

「無ければ妾も安心でございませぬから、本統に安心が出来ますやうに、是非お見せ下さいまし、貴君が隠すやうになさいますと、却つて疑念が起りますから」

小五郎も今は拒まれない場合になつて、胸を躍らせながら封を切つた、

元子はまつと寄添つて、一字をも讀漏すまじと構へて居る、中は果して末子の手で、日々夜々待つに効のないのを怨んだ體書であつた、

元子は横から手を伸したと思ふ間に、早くも手紙を奪ひ取つて

我が懐中人捻込んだが、はやその時は血相が變つて居た、

其二十五

小五郎は茂に油揚を攫はれた思だが、空つ途惚けて「末子さんにも困るよ、もう無關係になつて居るのに、そんな手紙を寄越すなんて」

元子は凄まじい顔を上げて、貴夫まア能く左様な事がッ、何が無關係でございませよ、貴夫の方に逢はうとなさるお心がございませよ、末子さんもこんな事を申して參るのでございませ、妾はございませ斯様な事だらうと存じて、三原さんへ預けるのは不承知に、貴夫をお遣り申さなければ好いのだと存じて、承知いたしました、したんですが、貴夫は事に假託けて行きたがり遊ばすし、また末子さんも末子さんで、こんなまア厭らしい文を寄越すのでござい

ますから、妾は兎ても安心が出来ません」

「なに、私が行かなければ好いのさ」

「それが本統になりませもんですか、また何日までもこんなやうでは、妾はこの命が縮まります、今までいさへ、貴夫をお出し申すまいと思つて、どんなに心を癒めましたか、寐た間も油断が出なかつたんでございませもの、それに斯うして末子さんの方から、呼寄せやうと掛つて居る事が分りました上は、妾はまた一人心配で、氣の休まる時がございませんから、決してこのまゝに爲ては置けません、何でも思ひ切つた事を爲て、末子さんを懲らして逃らなければ」

「ね、思ひ切つた事をする、どうする積か知らないけれど、あんなに預けて置くより仕様がなないぢやアないか」
「いゝね、ございませ、見て居て下さいませし」と元子は勢ひ込んで立上つた、

小五郎はぎよつとして、心もどなく、短銃を置いた柵の上を見返つた、

「いや、矢張……」と元子は考ながらごたりと坐つて「今妾が富士見町へ参りましたら、貴夫は不在を幸ひに、末子さん所へ行つしやるでせうから、うつかり家は明けられませんが、これ、松、お前ね、大急で玉木様へ行つて、大變が出来ましたから、叔父様に直様入らしつて下さいましつて、好いかい、そしてね、井上……いや、定の方が好いだらう、今すぐに定を此處へ」

「定、この事はお前に限るんだからね、お前三原さんのお家へ行つて、末子さんを呼んで来ておくれな、それもね、たい呼びに行つたんぢやア、末子さんが變に思つて、歸つて来ないかも知れないから、旦那様が仰しやいます、今日は奥様がお芝居へ行らした、丁度お不在でございますからと言ふのさ」

「元子、そんな嘘を言つて遣つちやア……」
「いや、貴夫は黙つて居らしつやいまし、定、好いね、今末子さんから旦那様へ、手紙が来たんだから、お前がさう言つておくれだど、すぐ一所に歸つて来るさ、だが本統らしく言はなければ可くないよ、そして急ぐんだからね、馬車で迎へて来ておくれな」
お定は小五郎の氣を兼ねて猶豫つて居たが、遂に詐の使命に立つた、

「元子、お前は末子さんを呼んでどうする積さ」
「御心配はございせん、藏の中へ牢を拵へて、其所へ末子さんを押籠めて、そして錠は妾が預かつて置く積でございます」
「そ、そ、そんな残酷な事が出来るもんか」
「でも放し飼に爲て置きましては、心の休まる時がございせんもの」

「だつて私に監禁する事は法律が許さな、」

「法律が何でございます。もし喧しければ、願を上げたら好いんぢやアございませんか」
「だがそれは狂人とか放埒とか……」
「末子さんは放埒ぢやございませんか」と元子は夫の詞を何處までも受付けない、

其二十六

玉木文平は心配顔で私市へ駈付け、導かれるまゝ小五郎の居間へ通つて、挨拶もなく夫婦に向ひ、「呼びに来た松に聞いても知らないと言ふのだが、大變とはどんな……」
元子は耳を傾けながら「あ、叔父様、丁度末子さんが歸つて参りましたから、少しごうぞ」と詞を制して、鳴を静めて待構へた、末子は嬉しく小五郎に逢へる事だと、いそぐこの間へ入り掛けて、はつと棟側に立縮んだ、

「末子さん、嘘を言つたのは妾が言付けたので、定の咎ぢやアありませんよ、兎も角此處へ来て下さい」と元子は強く畳を叩いた、末子は意外の思だけれど、今更逃げもされないもので、そつと小五郎の顔を見ながら入つて坐つた、
元子は例の艶書を懷中から引出して、その紙を展しながら「叔父様、この紙は末子さんから参つたんでございます、お話は色々ございますけれど、まづ是を御覽下さいまし」
末子は始めて扱はと氣付いて、眞赤になつて俯向いた、
文平は首を捻りながら目鏡を掛けて、一頁り讀了ると怒を含んで「元子、これは末子から小五郎さんへ寄越した手紙だね」
「はい、懲しめの爲に三原さんへ預けられて居まして、今に矢張りその通りで、少しも心を改めて居ないのでございますから、このまゝに爲ては置けません、それゆゑ叔父様に御相談を願はうと存じまして、故々来て頂きましたので」

「道理だ、決してこのまゝに爲ては置けない、これ、末子、お前はなせ改心をしないのだ私は最初元子から聞いた時、直に意見に來るのだったけれど、耻かしい思ひをさせるのも可哀さうだから私の方へ預かつた上で、それとはなく言つて聞せやうと思つたんだが、外聞があるとかで、三原へ寄宿に行つたそうだ、それはまづ好いとして、なせ過を改めないで、こんな手紙を寄越すのだ、眞に不埒千萬だ、同じ不埒な小五郎さんにも言ふ事はあるけれど何しろこのまゝに爲ては置けない」

「左様でございますとも、ですから妾はね、奥庭の衣裳藏の中へ牢を拵へまして、其處へ押籠めて置かうと存じますので」

「は、牢だ、そ、そんな事が出来るもんか」

「だつて左様にでも爲ませんぢやア、安心が出来ませんもの」

「む、そりやア安心が出来ないのは無理もない、だから手紙一本出せないやうな、嚴しい家へ預け換へるのだ、矢張り私が預か

つて歸つても好い」

「いや、それは無効でございます、ごんなにか爲て隙を見て、また呼出すに相違ございません」

「ぢやア何處か遠方へ……返子の別荘へでも遣つて置くか」

「それは尙更無効でございます、別荘へ参つたら自分大將でございますから、我儘な事はつかり爲て、始終逢ひに参りますよ」

「威程、それは何とも言へない」

「ですから矢張り牢が好いのでございます」

「いや、いくらお前の望でも、そんな事はさせられない、何處かへ遣つて置くのに限る」

「遣らなければなりませんのなら、些とは歸れない外國へでも遣つて下さいまし、日本の中では決して心が許せません」

文平は手を組んで思案の末「その外國へといふのは好い思ひ付だ、末子は丁度英語に熱心だから、芳也が歸朝するまでの所、修

行に遣つて置くのは至極好い
元子は假初に言つた詞が通つたので、邪魔物を逐拂ふ事が出来るのを悦ぶと同時に、冷笑の目を注いで、末子を見る事を禁じ得なかつた。

其二十七

末子は非常に驚いた、芳也が歸朝するまで外國へ遣つて置かれ
ては、もう小五郎と逢引が出来ないどころか、生涯姉に笑はれ
ひで、笑ひ返す折がなふ、だから是はどう爲ても拒まねばと、耻
ひながら顔を上げて「叔父様、妾は外國なんぞへ」と言掛けた、
元子は忽ち横間から「あら、そんな勝手は言はせません、ねね
叔父様」
「さうだとも、末子、元はお前が悪いのだから、今更勝手は言は
せないよ、それも此方が不相應な事を強付けるのなら何だけれど

お前が外國へ修行に行くといふ事は、誰も當然と思ふ者ばかりで
怪しきは爲ないから、世間へは内々で、不義の中を隔てるのに丁
度好いのだ、當家の風波を鎮める爲に、私は是非勤める、どうで
も行つてくれなければならぬ」
「でも妾は……」
小五郎は今まで黙つて差控へて居たが、この時やうく口を開
いた、それがまた至極意外で「末子さん、業道に行らつしやる方
が好いでせう」と却つて外國行を勤めるのだ、
末子は深く訝つて「おや、貴君までがッ」
小五郎は開流して文平に向ひ「私はふつり改心いたしました
験に、末子さんを諭したうございしますが、元子へ意地を持つて居
られますから、此處ではいくら申しても無効だと存じます、就
ては些と彼方へ參つて、能く申含めたいので……如何でございま
せうか」

元子もとこはまた横間よこまから「いや、貴夫あなた、さうは参りませんよ、左様さやうな事を仰おぼしやつて、何か内証うちしやう話をなさるんでございませう、誰たれがそんな事をさせますもんですか」

文平ぶんへいは聞き難がたねて「いや、元子もとこ、小五郎こごろうさんが不同意どういなら何なにだけれど、外国がいこくへ行くやうに諭さうと言いはれるのだから、心配しんぱんな事はなないさ、ぢやア小五郎こごろうさん、能よく言いつて聞きせて下ください」

小五郎こごろうは許ゆるを得えて、末子まつきを誘いつて出でて行いつたが、およそ十分間じふぶんかんも経たつた頃ころ、また末子まつきを誘いつて入いつて來きた、

「どうでしたね、本人ほんにん承知しょうちしましたか」

「はい、能よく得心とくしんが参まつたやうでございませう」

「は、ア、それは結構けいこくです、末子まつき、お前まへいよ／＼得心とくしんしたのだね」

「はい」

「それで好いい、それで私わたしは安心あんしんした、時ときにこんな事は不案ふあん内うちだから、小五郎こごろうさんへ御相談ごさうだんだが、外国がいこくは何處どこへ遣やつたら好いいでせう

丁度ちやうど芳也よしやが英國えいこくに居いるのだから、末子まつきも矢張り英國えいこくへ遣やつて、あの男おとこに世話せわをさせて、そして歸朝きせうする節ふしに、一所いよに連れて歸かえつてくれると言いふ事に爲いたら、大きおほきに都合ごうごが好いいと思おもひますが」

「成程なるほど、それは好都合こうごうごでございませう、併ともし末子まつきさんが芳也よしや君くんと他人たにんの間柄まがらひでございませう、却かえつて宜よろしうございませうが、餘あまり好いんで居いられない許嫁いよめの中なかですから、只今折角せきかく承知しょうちされましたのに、英國えいこくへ行くのならと、また厭氣いとがにても……」

「そりやア其處そこもありませんね」

「ですから米國べいこくになすつたら如何いかにでせう、三原みやはらが彼の地そのちの學校がくに居いりましたから、米國べいこくでございませう、あの人ひとに委まかしく聞きく便利べんりがございまして、末子まつきさんも萬事ばんじ心得こころえた上で参まられる事が出で來きますし、他の者たのひとも安心あんしんして遣やれると申ますもので」

「む、ぢやアお前まへさん御苦勞ごくろうですが、兎うも角かく三原みやはらに様やう子こを聞きいて見て下くださいよ、末子まつきは出發しゅつぱつするまで私わたしが預あづかる事に爲いて、今いまか

ら連れて歸つて、お返辭を待つて居ますから」
「はい、何れ末子さんの寄宿を斷る用もございますから、早速参りまして、歸りにお宅へ伺ふ事にいたしましたせう」
文平はやがて末子を連れて歸つて行つた、

其二十八

小五郎は三原へ行つて、その歸り路に玉木へ寄つて、主人の居間へ導かれた、
其處に文平と共に待構へて「大層御ゆるりでございましたね」
と言つたのは、案外にも妻であつた、
「あ、お前、何時、何の用で御方様へ」
「いね、別に用はないのでございますけれど」
「ちやア何故」
「末子さんが此方へ参つて居りますから、貴夫にお逢はせ申さな

いやうにと存じまして」
小五郎は呆れ顔で「それは入らざる心配ちやアないか、外のお家ちやアなし、當家には叔父様が居らつしやるのなもの」
「どうして、誰様が見張つて居らしたつて、油斷が出来るもんですか、先刻叔父様にお願ひ申して、末子さんをお二階へ上げて置いて頂きましたけれど、矢張り心配でございますから、妾は貴方の御用の濟むのを待つて、御一所に歸る積でございます」
小五郎は厭なく面持で、じろりと見遣つて、さて文平の方へ向直つた、
「どうでしたね、委しく様子が分りましたか」
「はい、能く分りました、三原はオハイヨ州のオハイヨ大學で學んだのださうで、丁度其處の學科の程度が、末子さんに相當だと申しました」
「成程、今日まで教へて居た教師がさう言ふのなら、その學校へ

「遺るに極めませうよ」

「そして末子さんの従者でございます、何れ女を一人付けて遣らなければなりません、三原の申す處では、末子さんは打付け米人と話は出来難ねる様子ですから、最初の間は通辯をも付けなければなりません、少し大形かと思ひますから、いつそ三原を頼んだら如何でございます、あれなら通辯も従者も兼ねてくれますから」

「そりやアあの人なら氣心も分つて居るし、行つた先の勝手も知抜いて居るのだから至極好いが、一家を控へて居るのですから、承知してくれるかどうだ」

「それは如才なく當つて見ました、處が妾はもう一度行きたいのだが、費用を恐れて控へて居るので、丁度お嬢様のお供を爲て行けるのなら、そんな幸な事はないと申します」

「む、三原がさう言つてくれるのなら、大きに都合が宜しいよ」

元子は傍から故障を入れて「いね、叔父様は左様に仰しやいますけれど、妾はあの人を付けて遣るのは不承知でございます」

小五郎はまた厭な面持で「何故さ」

「だつて三原さんは貴夫とお心安いんでございますから、矢張り油断が出来ませんわ」

「はてね、三原は末子さんに付いて米國へ行つて了ふんだよ、油断が出来ても出来ないも、そんな心算はない筈だが」

「そりやアいよ、彼方へ参つて了へば宜しいけれど、三原さんが貴夫に頼まれて、一所に米國へ行くやうに見せて置いてさ、末子さんを何處かへ隠すかも知れませんが」

「は、變な事を言出したものだ、出發の日は見送人があるのだから、そんな馬鹿な事は出来ないぢやアないか」

「なに、東京では出来すまいけれど、横濱へ参つてから」

「さう思ふのなら、何れ私も行くから、お前も横濱まで見送るが

好い、そして末子さんの乗込んだ船が、烟を立て、海上へ出て了
ふまで見届けたら、もうそんな疑いは残らなからう」
「それは左様でございます、其處まで確に見届けましたら」
「ちやア見届ける事にするさ、それなら三原でも承知なんだね」
元子は始めて快く頷いた、

其二十九

末子は厭でも出發しなければならぬ日に差迫つた、で、親戚
や朋友や出入の者などに送られて、竹枝と共に新橋の停車場へ行
つた、何が玉木へ預けられてからは、一度も小五郎に逢はなかつ
たのだから、今日はしみじみ話がある、就いては汽車の中でと思
ふので、小五郎を除いた外の一同行へは、遠路恐れ入るとの口實を
以て、横濱への見送を堅く辭した、
「左様にまで仰しやいますなら」と誰も彼も不本意らしい事を言

つたが、實の所はさうでもないか、中に手まはしの早いのは、始
めから品川までも行かない積で、すでに入場切符を求めて居た者
さへあつた、
だが元子のみは頑として聞入れないで、強ひて一等室へ同乗し
て、故らに末子と夫との間へ割込んで、嚴重に看守して居る」
末子はそれもある當が外れた、すでに新橋を發車して、途中の驛
々を過去つても、たい一言さへ漏す事も出来なかつたので、心中
の憤悶を目の色に顯して、横濱驛へ着いた時、姉の横顔をぐつと
睨んだ、
さて何れも汽車から下りて、人力車を列ねて海岸へ行くど、も
う解纜に間がないと言ふので、船へ乗る者は急いで乗る、見送る
者はたい見送るで、双方僅に「左様なら」「御機嫌能く」と言交す
だけの餘裕より無かつた、
末子はそんな仕入口上で済むのではないのだから、遂に全く言

ふ時機を失つて了つて、たゞ僅に一句、それも思ふ小五郎へではなく、思はない……否、憎うく思ふ姉へ「覺てらつしやい」

と鋭く言つて、そのまゝ振り返りも爲なかつた、海山萬里の異域へ赴く時に臨んで、親しかるべき姉へ殘す詞が是だ、訣の涙は何處へ忘れて來たのだから、もし目に潤があつたとすると、それはどう

せ恨の涙であつたらう、船はやがて動き始めた、通辨兼從者の竹枝は、さすが甲板の上へ出で、最後の會釋を察して居た、

元子は元の位置に立つたまゝ、船が追々遠くなつても、なほ瞬もしないで見詰めて居るのだ、無論袂を惜んでゐはない、沖へ沖へと出て行くほどづゝ、口元の笑が次第に多く浮んで來るのだもの、

「元子、もう好いだらう、歸らうちやないか」と小五郎は後から

聲を掛けた、

元子はなほ沖を見ながら「はい」

「さア、何時まで見て居ても同じ事さ」

「ですが貴夫、あの船はもうあれ限で、神戸へ寄りはないので

ございますね」

「知れた事さ、神戸はずつと右の方で、あの船の行く針路とは、全で方角が違つて居るぢやアないか、それにあれは神戸から來て米國へ行く船だもの、後戻りなんぞするものか」

「ぢやア直に行つて了ふのでございますね」

「さうだとも」

元子はほつと安心の息を吐いて、さて浮々として歸路に着いた、

其三十

元子は一時夫を怨んで、突慥食にのみ遇つて居たが、それは言

ふまでもなく嫉妬より起つた事だから、相手の末子を海外へ逐拂つてからは、がらりと變つて優しくなつて、願ふ大切に扱ひ出した、が、夫の水性をば経験の上で知つた後だから、決して心は許さない、若しまた他の女へ手を出しは爲なからうかと、相替らすお傍去らずで見張つて居るのだ、今もそれで、

處へ小間使が電報を持つて来た、

小五郎は直に讀んで「元子、末子さんから無事着の電報だ、もう

うサンフランシスコへ着いたのだ、早いもんだねわ」と言ひつゝ、

日を探つて見て「それもさうだ、彼は二十日近くになるのだから」

元子は忽ち顔を絞めて、いかに大切にする夫へも、この時ばかりは返辭さへ爲なかつた、

その日から半月ほども経つて後、また末子から小五郎宛の郵便

が届いた、

元子はそれと見ると、狼狽へて引攪つて、火鉢の中へ投込んで

早く燃盡せよとばかりに、火箸でぐつと抑へ付けた、

小五郎は驚き返つて了つたが、もう手を出しても及ばないので

身を後へ反しながら「そ、そ、そんな亂暴な」と妻の顔をきつと

見た、

元子は冷笑を含みながら詞はやさしく「ほんとに濟まないの

でございませうけれど」となほ火箸で抑へて居る、

「濟まないぞ知つて居るのなら、そんな狂人染みた事を爲ないが

好いちやアないか」

「でも中の文句は分つてございませうもの、此間は電報で、委しい

お便が出来ませんでしたから、無事に着いた事を改めて申して參

つたんでございませうよ」

「だつて外に用があつて寄越したんかも知れやア爲ない」

「用があつたつて宜しいちやアございませんか、貴夫が是を御覽

なさると、またお思ひ出し遊ばしますもの」

小五郎は次第に不平の聲を高めて「だつて互に遠く隔たつて居るのだから、よし思ひ出した處で、間違の出来やう譯がないぢやアないか、何しろ酷い事をするよ、見てから火中する手紙はあるけれど、まだ見ない間に燃して了ふなんぞは餘りだ、また此後も屢々手紙が来るだらうが、見るだけは見せてくれなくちや、いくらお前が家付の娘でも……」と厭味な事を言掛けた、

元子は遂につんとして「何とでも仰しやいませ、是と申すのも末子さんが都合なからでございませ、變な事のあつた貴夫へ手紙を出すのが可ませんわ、何か用事がございませぬなら、姉の妾へ申して来れば宜しいのに……あゝ、詰らない、折角お仲好くいたして居りましたのを、末子さんの爲に、貴夫もお怒り遊ばすし妾も心持が悪くなりました、またあの末子さんは何處まで妾へ祟るのだらう、厭だ、やうく忘れて了つたかと思ふと、またこれだもの」

「もう止さうよ」と小五郎は氣を變へて「いつそ元子、そんな事は水に流して、豫て行きたいと思つて居た返子へ一處に行つて、面白く遊んで来やうぢやアないか、私はまだ家の別荘を知らないのだから」

元子はこれで機嫌を直して「ぢやア参りませう、仲氣に暫く返留して、厭な事を忘れませうね、併し何日から」

「なに、今日の今からでも好いさ」

「おやく、また大層急でございませぬね、ぢやア早速支度を爲なければ」と足元から鳥が立つたやうな騒ぎだ、

其三十一

私市家の返子の別荘は、海に臨んだ山の中腹にあるのだから、眺望はこの邊で聞けたものだ、

小五郎は朝早く二階の雨戸を繰明けて、寝衣のまゝで海上を見

渡すと、忽ち感歎の聲を發して「やア、好い景色だ、何とも言へない、富士が見ゆる、元子、富士がッ」と遠しく叫んだ、昨日大急で支度をして、木村仲造といふ書記と、二人の小間使とを引連れて、夜に入つてから來たのだから、この別荘の眺望は始めて見たのだ、

元子は珍しくはないと見わた、寝間で首を掻けたばかりで、貴夫富士が見えますか、ちやア晴れましたのでございませぬ、昨夜は降りさうでございましたけれど」

「晴れたとも、日本晴さ、富士山が少しも雲を持たないで、ぬつと顔の上へ見わた時は、私は嬉しさに膽を潰したよ、何しろ好い景色だ、返子へは何遍も來たけれど、こんな絶景な處があるとは知らなかつた、すつと真正面にある島が江の島で、右方の海岸が七里が濱だが……望遠鏡を持つて來たつねね」

「はい、小さい方の鞆へ入れて参りました、其處の遠柳の下へ置か

せた筈でございませぬが……」
小五郎は早速望遠鏡を取出して、また縁側へ出て仔細に見遣りながら「まだ時刻が早いから、七里が濱に通行人は見えないけれど、漁師の娘らしいのが、浪打際へ下りて何か爲て居る、海草を乾して居るのだらうか、全く盡だねね、油畫に有りさうだ、あの邊の景色だけでも十分なのに、加之に富士が見ゆるのだから、元子、私は當分東京へは歸らないよ」
「ほッ、大層お氣に召しましたのね」
「眞に氣に入つた、はッ、この下に漁船ではないやうな船があるが、あれはこの別荘のか知ら」
「左様でございませぬ」
「ちやア早速乗つて見やう、運動かたぐ」
「あら、お危うございませぬ貴夫」
「なアに、杉中の房州の別荘で、毎年避暑中には舟に乗つて、稽

古が積んで居るのだから大丈夫さ、まアごんなもんだか、此處へ出て見て居て貰ひたいもんだ」

「ちやア拜見いたしませうよ」

小五郎は勇き切つて下りて行つたが、忽ち濱邊へ走り出して、

船を自由に漕廻しつゝ、鍛へた腕を懸つて居た、

こんな事で機嫌よく遊んで、早くも五六日を費した、尤もその

間には、夫婦主従で鎌倉見物に行つた事もあるし、小五郎一人で

何處かへ出掛けた事もあつた、

小五郎は或夜晩酌の興に乗じて「ねえ元子、今夜は大層月が好

いから、船遊を爲やうぢやアないか」と突然に言ひ出した、

「おや、だつて晝なら何でございますけれど」

「そんな不風流な事を言つては困る、海は却つて月のある夜の方

が面白いのさ、誰も供を連れないで、この二人切で行つたら愉快

だよ、風でもあるのなら何だけれど、幸ひ海が穏かなんだから」

「左様ですわね、浪の音は聞かせんねわ」

「だから行かうよ、船頭が違ふ、船底の入つた私だから、少し風

が出た處で安心なもんさ」

「ほゝ、船ばかりは御自慢でございますわね、ちやア参りませう

よ」

「船ばかりはこは御挨拶だが、行かうと言ふのに、免じて咎めな

いで置かうよ、はゞゞゞゞ、さア行かう」

やがて夫婦水入らずの船を泛べつゝ、大膽にも沖へくゞと漕出

したが、すでに二海里ばかりも行つたかと思ふ頃、不意に元子の

泣聲が聞けた、

其三十二

返子の某旅館の一室に、肺病らしいのと脚氣らしいのが、必

死に碁を圍んで居る、と、同じ出養生客四五人と、昨夜泊つた東

京の旅商人とが二手に分れて、助言の競争を遣出した、
處への手基は止して来たのは、やはり出養生の八字鞆で「賭君、
そんな下手は止して、僕の話を開給へ、大變な事がある
んだ」と目を据ゑて熱心に言出した、

で、何れも手を休め口を休めて、ぶつと八字鞆を見守つた、
八字鞆は乗地になつて「昨夜まだ宵の内だが、この沖合で女の
泣聲が聞けたんさ」

「む、あれなら僕も知つてるよ」と肺病が詞を挿んだ、
八字鞆は鼻の先を折られた形で、俄かに弛んで「さうしか、君
はもう知つてるのか」

「なに、もうも牛もありやア爲ない、昨夜すぐその時に聞いたん
さ、微だつたけれど、さやつと絞殺されるやうな聲を」
八字鞆は嘲るやうに「ぢやア只それだけ」
「さうさ」

「へ、只それだけなら、土地の漁師も聞いたと言つてるさ、僕
はその前後の事まで知つてるだから、賭君にお話し爲やうと言ふ
ので、この事件を人に話す資格のある者は、今の處では恐らくは
僕一人だらう」

「ぢやア謹聽」と彼方向になつて居た脚氣が叫んで、手に持つて
居た石を投出したながら向直つた、

「む、賭君が神妙に聞く積なら話すがね、昨夜僕は喰過ぎたもん
だから、海邊を運動して居ると、彼處の私市の別荘から、男と女
と二人連で濱へ出て、船の中へ乗込んだ僕は違つた事はないけれ
ど、私市の主人と細君とらしかつた」

「あの細君なら僕も見つた、素的な美人だ」と横の方から言つた者
があつた、
「さア僕も月に透かして拜見したが、頗る付の美人のやうだつた
その夫婦で船へ乗つたが、船頭も連れないで、男がすんぐ漕出

すちやアないか、身を持つた人間だから、柔弱らしく思ふけれど
流石海國男兒だよ、だが女も剛氣だ、何れ海上で月を見やうとい
ふ洒落だらうが、深窓で育つた婦人にしては、この夜中に同行す
るのは感心だと思つて、十分間ばかりも見て居たけれど、足が疲
れて歸つて来た、そして暫くすると、そら、例の女の泣聲さ、僕
は何分夫婦で乗出したのを見て居るもんだから、あの細君がどう
かされたんぢやアなからうかと、酷く氣に掛つて打遣つては置け
ないのさ」

「相手は美人だけにね」と誰やらが小音で、
だが談佳境に入るといふ時だから、八字髷は耳にも掛けないで
語り進んで「だから僕はまた濱邊へ引返して、じつと沖の方の様
子を窺つて居ると、今の船が歸つて来た、僕は先方に見て居たが
やうに見極めたいと言ふ腹だから、小一町も此方から見て居たが
諸君、此處だ、夫婦で出掛けて行つた者が、男一人で歸つて来た

よ、變だらう」
「へい」と今度は眞面目で聲を放つた、それは旅商人だつた、
「だから僕の察する所さ、何か事情があつて、主人が細君を斬殺
して、海へ沈めたのに相違ない、就いては多少痕跡があるだらう
と、實は今ね、そつと船の中を見に行つたんさ、だが別に血が滴
つても居なかつたから、探偵でない僕には、船を證據には出来な
いが、何しろ無惨な事を遣つたんは遣つたんさ、警察はまだ知ら
ない様子だけれど、あの別荘で人間の數が一人足りなくなつて
んだから……」
皆は遂に一心に聞出して、誰も交返す者はなかつた、
やゝ時が経つて後、旅商人は歸つて行つたが、その口から漏れ
たものか、彼方此方で噂が立つて、刑事巡査が手を入れ始めた、

其三十三

玉木文平は眼鏡を掛けて、先刻小間使が置いて行つた東都新聞を取上げた、

「おや、阿父様はまだ御覽なさらぬの」と今来て襖を明けながら言つたのは、文平の末の女で、捨子と言つて、海老茶の袴を穿いた十五六だ、學校へ行くのにはまだ時間が早いので、この間に愛読の小説を見やうと思つて来たのらしい、

「いや、私は急がない、見るなら見な」と文平は新聞を押遣つてそして掛けた眼鏡を外した、

「ちやア些」と捨子は膝行しながら入つて、忙しく新聞を引き寄せる、直に小説のある頁を明けた、

「どうだね、その小説、久しくだら／＼書いて居るが、今日は少し面白くなつたか知ら」

「あら、始から面白いちやアございませぬか」「さうかね、お前には始から面白いが知らぬが、私には少しも

面白くないよ、毎日出る人間が極つて居るのと、無理に引延して居るのとで」

「ほ、無理に引延して居るんだなんて」「……何分目先が變らないから、同じ事を繰返して居るやうに思

はれて、悶つたくつて可憐い、假令は一回讀んで了つて、今日は事柄がどれだけ運んだかと考へて見るのに、から進んで居ないの

だもの、私は忙しい時なんぞは見ないで了つて、一日二日飛ばしたまゝで讀む事もあるけれど、だつて筋が分つて行くのだからそ

れが引張り延して居る證據で、どうしても面白くない譯さ」「ちやア阿父様は讀む時の心持はさうでも、たゞ早分りのするの

がお好なんでございますね」「まア……まアさうさ」

「妾はまたこんな方が面白うございますわ、つい心を引寄せられ

て、自分の事のやうに思つて何だか心配で、讀まない譯には参り

「奇體だね、そんななら、小説が好いと、もう少し目覚しく書いて、てきばき遣つてくれなくつちや」

「ちやア阿父様には講談の方がお宜しいので」

「は、ムムム、阿父様には小説の妙所が分らない、といふ腹で言ふのだらうが、なに、そんな小説よりは、全く講談を読む方が面白さ、兎も角目先が……」

捨子は遂に聞流して、趣味饒く讀了ると、雑報へ目を移したが忽ち「おやッ」と奇聲を放つて「阿父様、三番町の兄様や姉様の事が出てとさいますよ」

「は、小五郎と元子との事がね」

「はい、さうもまア大變」

「と、と、ごんな事が出て居る」と文平は眼鏡を掛けながらすと寄る、

捨子は此處と見出を抑へて差出したが、その手は甚く顫わて居た、

● 薬家の夫人惨殺の風聞 麴町區三番町の私市小五郎氏は數日前夫人と共に相州返子の別荘へ赴きし由なるが一昨夜の事なりとか右別荘にて同氏が夫人を惨殺せしとの風聞あり一説には別荘内の出来事にはあらず船遊びに托して水死せしめしなりと傳ふ現に海上にて夫人の悲鳴を上げし聲を聞付けたる者ありとも言へり何れ再探の上確報すべし

文平は顔の色をさつと變へて「成程大變だ、こんな事がある譯は決してないのだが……併し三番町へは何とか便があつたらうから捨子、誰かを早く、いや、私が」と言ふと共に立上つて、新聞を引摺んだまゝ駈出した、

其三十四

私市家の表門の内外には、馬車や人力車が數限りなく幅濶して居て一二輛歸つて行つたかと思ふと、また後から忙しうに駈付け來る様子がいかに珍事有り氣に見ゆる、
文平はこの體を見て、ますく胸を森かせながら、内玄關からすつと上つて、勘定場を見回しつゝ大聲で「井上は、井上は」
井上佳作は大玄關へ出て、來訪の人々へ應接を爲て居たが、聲を聞付けたか飛んで來て「おう、富士見町様、只今使を差上げましたか……」
「いや、行違つたのか逢はなかつたけれど、何しろ大變ぢやアないか」
「さア、それが貴君、どうもまことに奇體なんでございます」
「暹子から何とか便があつたかね」
「いや、ございませぬから奇體なんで」
「ぢやアお前は是を見たか」と文平は携へて來た東都新聞を突付け

た、
「いや、それに出で居るさうでございしますが、御當家へは取つて居りませぬので、少しも存じないで居りました、すると朝早く御門をお叩きなすつて、澤田様が第一番に入らしつて下さいましてどうも大變な事だと仰しやいますから、へい、何が大變で申すやうな事で、委しく承りますと、今朝の東都新聞に出で居た、御主人が奥様をお手にお掛けなすつた御様子だ、それは一昨夜の事だと仰しやいます、併し私が考へますのに、彼方へは木村がお供を爲て參つて居りますから、左様な事がございしましたのなら、一昨夜の中に電報を打ちますか、昨朝自分が歸つて參りますか、何ぞか通知をいたす筈でございしますのに、今以て音沙汰がございませぬから、或は虚報かとも存じます、けれど押切つてさうだとも申されませぬので、澤田様に引續いて、あの通りお見舞ややお弔儀に見えますおお客様方へ、御返答の仕様に當惑いたして居りま

すやうな事で、何しろ御主人の是ほどの大事を、加之も三日目の
 今になりすまで、まだ虚とも實とも突止めないで居るかと思は
 るかと存じまして、實に赤面の至りでございます」
 「いや、さう言へば私も赤面さ、こんな事があると思つたら、
 間で新聞を見るのだつたけれど、夢にも知らないもんだから、
 々と起きて、朝飯を済ませて、そして萬年青の鉢の掃除を爲て了
 つて、まだ加之に小説の悪口を言つたり爲て、それからやうく
 ……それも女に教へられて讀んだ位の事で、一番に來なければな
 らない私が、他家の見舞客より遅れて來たのは耻入つた事だ、時
 に井上、他家へ對してもこのまゝ時を費しては居られない、早速
 返子へ出掛けて、いよゝゝを突止めなければ」
 「はい、それは勿論の事でございませうが、兎も角電報で問合せや
 うと存じまして、すでに人を走らせましてございませうから、今に
 返電が參るでございませう」

「そりやア電報も電報だが、萬一これが事實だと爲て見ると、小
 五郎さんは警察へ引かれて居るだらうし、木村も差入とか何とか
 で奔走して居るだらうから、返電の來るのをたい待つては居られ
 ないよ、だから私も行く、お前も一所に…だがあんなに人が見
 るのだから、若い者に任せても置かれまい、好いわ、お前は何と
 か挨拶を爲て居てくれろ、まづ私一人で行く事に爲て、虚實とも
 改めて電報で知らせて寄越さう」
 「ぢやア恐れ入りますが、安本をお供に差添へませうから、どう
 か何分」
 文平は直に書記を従へて出發したが、空を飛ぶやうな汽車の速
 力も遅緩しく、途中の乗換はなほ遅緩しくて、続け様に舌打を爲
 ながら、やうく返子の別荘へ着いて見ると、果して虚報で、元
 子は無事息災だった、

其三十五

私市家の別荘へ文平が行つてから、およそ二時間ばかりも経つた頃、頼持の選しい三十七八の洋服男が訪れて、玄關の取次へ東都新聞社員道野正方とある名刺を出して、元子に面會したいと言つた。

すると書記の木村仲造が出て、憎々しさうに髭面を見ながら「貴君の新聞で馬鹿な事を書いたちやありませんか、今郵便で取消の請求は爲て遣りましたけれど、あんな事をお書きなすつたもんだから、當家の迷惑はどの位だか、實に少からん不面目を蒙りましたよ」

「御道理です、事實無かつた事ださうで」

「さうですとも、また有つて堪るもんですか」

「ですからたい風聞と書いて」と正方は辯解し掛けた、

仲造は忽ちそれを遮つて「いね、風聞にしる何にしる、事實を確めも爲ないで書くなんぞは、餘り疎漏過ぎませう」

「決して、決して疎漏ではないです、何も間違つた事を書いたん

ではなし、私が當地へ来て聞かして、今に矢張り専ら風聞がゐ

るんですから、その風聞を風聞と爲て掲げたに就いて、御攻撃を

受ける責はありません」

「だつて當家に取つては、實に一通りならん不名譽です」

「まアお聞きなさい、能くお聞きなすつたら、おのづと御當家の

お爲方にもなるんです、其處で紙上へ風聞と爲て掲げて、何れ確

報すると讀者へ約して置きましたから、私は今朝の一番汽車で鐵

倉へ参つて、某筋で開合して見ますと、あれはたい風聞のみであ

つて、事實無かつた事だと言ふ事でした、けれど烟の颯る處には

火のある理屈で、風聞が立つといふのには何か原因があるだらう

私市さんの事ではなかつたけれど、外に似寄の事があつたのだら

うから、是非それを突止めやう、確報すると書いたのに對しても漫然とたゞ風聞のみであつた位では済まされないと、私は早速この返子へ来て、前刻から種々に手を盡して、風聞の出所を捜りました、所が不思議です、昨日夫人をお見受け申したと言ふ者もありませんが、無論私もさうだらうと思ひますが、また兇行のあつたのを目撃したと、断然言張る者もあるのです」

「だ、だ、誰ですそれは」
「私は某家で聞きました、同じく目撃したと言ふ者は、一人二人ではないやうです」

「怪しからん事です、奥様は現に彼方に居らつしやるんですもの」
「ですから御面會に参つたんです、ごうかお取次ぎ下さい」
「いい、それは無効です、奥様は東都新聞を御覽なすつて、大層御立腹ですから、決してお逢にはなりません」

「それは却つて御不利益ですがね、過日大山伯の夫人に、丁度今度と同様の風聞が立ちました、伯爵夫人は孫落に、誰にもお逢ひなすつたから、事の間違といふ事がすぐ明白になりました、そんな先例がありますのに、今夫人が面會をお拒みなさると、風聞はますます高くなりますよ、明日の東都新聞を御覽なさい、家の夫人は殺された風聞に就いてといふ見出で、社員を返子へ調べに遣つた所、夫人は無事だといふ者もあり、いや殺されなすつたと言ふ者もあるから、社員は事の真相を見極める積で、直接に夫人へ面會に行つたけれど、別荘では逢はせなかつた、屹と斯う出ます、私の方では是より外に書き様がない、所で斯う書いた、矢張り夫人は遣られたんだと、世間で思ふぢやありませんか、だが快く御面會下すつたら、現に夫人にお目に掛つて来たと言ひますから、取消も何も入らない、風聞の原因は外にある事に極つて、御當家に掛る世間の疑惑は自然に霽れるのです」

其三十六

「ちやアお目に掛りませう」と元子がすつと次の間から、

道野 正方はつくぐ元子を見上げて「果して御無事でしたね」

元子 はにと笑みながら頷いて「はい、就きまして、妾の方か

らも申上げたい事がございすから、どうぞ此方へ」と自ら客間

へ導いて「まアどうも飛んだ喉をされて居りますのを、少しも存

じないで居りましたが、今朝東京の不在宅から電報を打ちまして

變な事を問合せて参りましたから、返事は出しましたけれど、奇

體でならなかつたのでございす、處へ親族の者が東都新聞を持

つて参つてくれましたので、始めて厭な事を言觸らされて居る事

を知りまして、どんなに驚いたでございませう」

「左様でせうとも、お察し申します」

「それで妾は何故こんな風聞が立つたのか、あゝ縁喜でもないど

存じますと、俄に心持が悪くなりました、人様にお逢ひ申す事が

出来ませんので、つい失禮をいたして居りましたが、不圖考へ付

きまして、成程、喉は彼から出たんだと……」

正方は思はず膝を進めて「はア、何かお心に當る事があります

か」

「はい、それを貴君へ申上げて、新聞へ書いて頂きましたら、自

然喉も消ゆる道理だと存じまして、不快を努めてお目に掛りまし

たので」

「成程、それは大きに好都合で、どうかお委しくお話を願ひます」

「はい、一昨夜は好い月夜でございしましたから、海上の夜景を見

に行かうぢやアないかと、夫に勧められました、二人で船に乗つ

たんでございす、尤も夫は自慢でね、自由自在に洄回しまして

うか／＼沖の方へ出たものでございすから、少し疲れたと申し

て、船を放して休息をいたしました、其處でございす、止せば

好かつたんですのに……自分で申すのはお耻しうございますが、
妾は大變お跳で、十四五までは木登もいたしましたし、二三年前
には自転車に乗つた事もございまして、殿方のなさるやうな事が
好でございましてから、つい船を漕いで見る氣になつて、試に二三
度動かして見ましたの、すると難しいやうにも覺わませんでした
から、うづかり調子に乗過ぎまして、ぐつと向へ押した機に、力
を船に取られて了ひまして、海の上へ眞俯向に陥り掛けたんでご
ざいます」

正方は聞いてはつと顔を皺めた、

「その時思はず聲を立て、きやつと申したんでございますの」

「な、成程、成程、皆がそれを聞付けたんで」

「さア、妾も只今考へ付いたと申しましたのはそれで、立てた際

から喉が出たんでございませうかど……」
「全くさうでせう、併し能く御無事でしたね」

「はい、まア好い鹽梅にね、夫が後から引抱へて、取止めくれま
したから、命は助かりましたけれど、一時に怖くなりまして、す
ぐ夫に船を返して貰つたんでございませうが、只今思ひ出しまして
もね、身内がぞつといたしますの」

正方は急に首を捻つて「ですがね、實地を見たて申す者の詞で
はお歸りの時は御主人たゞお一人だつたと言つてますが」

元子は袖で口を仰へて「おほムムム、左様に見わたでござい
ませうよ、この事はがりはお書き下さつては困りますけれど、實
はね、海へ陥り掛けました時、この膝頭の所を船の舷へ打付けた
と見わまして、その時は大變痛んで、立てないのでございませう、
それも船は浪へ着きまして、上る事が出来ませんから、夫が
負つて歸つて遣らうと申します、妾は誰かを呼んで貰はうと存じ
ましたけれど、なに、夜中の事だ、見て居る者はないだらうと、
夫の肩に手を掛けまして、お耻しいね、子供のやうに……」

「は、ア、それでは少し離れて見て居ましたら、お一人のやうに見わたせうよ、いや、お蔭で能く分りました、私は貴女が御無事だとして見ると、また外の方面に就いて、風聞の出處を捜らなければと思ひましたが、もうそれには及びません、其處まで明白に承りましたら、風聞を撲滅させるのに造作はありません」

其三十七

今三番町の私市家の通用門から入つたのは、年は五十形だが、小意氣に造つた女愛結で、水口からせか／＼上つて「お棋ごん今日日は」と聲を掛けた、
 聲を掛けられたのは下働の下女で、何か摘み喰を爲て居たが、慌てゝそれを呑込んで「おや、お庄さん」
 「お使を頂いたから参つたんですが、奥様はもう返子からお歸り遊ばしたんですすつてねわ」

「さア、半月か一月も行つてらつしやるやうに承つて居ましたけれど、先刻急にお歸り遊ばしたの、それと言ふのもね」と言ひながら傍へ寄つて「あんな事があつたもんですから、どうせそれでいせうけれど……」

お庄は「さうですともさ」と頷いたまゝで、まだ／＼口を銜いて出さうな長話を避けて、足早に奥へ行つて、部屋の外から小間使へ取次を頼むとそのまゝ、すつと化粧の間へ通つて、持参の櫛を取出した、

元子はやがて小間使を従へつゝ入つて来て「お庄さん御苦勞さ

ま」
 「どういたしまして、奥様まアとんだ事でございしましたね、妾は新聞に出ました時、早速御當家様へお見舞に上りましたけれどまた何だつてあんな噂が立つたんでございますかね、馬鹿を、しいちやアございせんか」

「ほんとにさ、話にもならないの」
「併しまア御無事で御結構でございました、誰だつてほんとに爲
はいたしませんけれど、だつて噂を聞きました時はね、驚かな
いでは居られませんもの」

「本人の姿だつて驚いたもの」

「左様でございますませうとも、噂ほど恐ろしい物はございませぬ
わ」

「全くさうだよ、だから妾もね、もう氣味が悪くなつたから、急
に歸つて来たの」

「さア、只今もね、左様に申して居りましたのでございませぬ、ま
た御無理はございませぬわ、縁喜でもない事をお言はれ遊ばした
んでございませぬから」

「妾はもう一生ね、返子の別荘へは行かない積なの」
「そりやアお厭でございませうともさ」

元子はやうく鏡臺の前へ坐つた、
お庄はその後へ回つて、やがて髪を梳きに掛つたが、はつと異
様に驚いて、身を反返り掛ると共に、手にある梳櫛を取落した、
「おや」と元子は不審して、振返つて見上げながら「お庄さん、
お前さんどうしたの」

お庄は何氣なく粧つて「いね、ついね」とは言つたけれど、落
付いては居なかつた、

「だつて何だか……」

「なに、何でもないのでございませぬ」と言つた時は、はや平生に
返つて居た、

「それなら好いけれど、急に病氣でも起つたのかと思つて、妾は
胸り爲て了つたよ」

「どうも済みませんでございました、些とそ……胸へ差込むや
うな心持になりましたんでございませぬから、つい狼狽へましてね

「なんだ失禮な事を」
「なに、失禮も無禮もないけれど、まだ氣分が悪いのなら、今日は結はないでも宜しいよ、このまゝ束髪に爲て置くから」

「いわ、もう何ともございませぬから」
「さう、ちやア結つて貰ひませうねわ」と、元子は鏡の方へ向直つた、

お庄はまた櫛を取上げたが、何處となく慌てた様で、其處々々に結上げて、逃げるやうに暇を告げた、

其三十八

苦味走つた三十二三で、蕎麥屋の印神櫃を被た男が、元園町の某新道へ掛つて、女髪結の看板の出た家へ行くと、表戸が閉つて居たので「おや、お庄はまだ歸らねわ」と、咄きながら立止つたが戸締の勝手を知つて居ると見れて、無造作に引明けて、すつと内へ入りながら、袂から口附の巻煙草を取出した、

丁度この時主人のお庄が歸つて来て「あら、熊さん」とにつくり爲たが、忽ち笑を消して了つて「お前不在に来るのも好いけれど、此間のやうにさ、後の締を能く爲ないで、戸を引寄せたまゝ歸つておくれでは困るよ、何も取られるやうな物はありやア爲ないけれど、だつてお前、泥棒に入られて御覽」

「いや、濟まなかつた、お前の不在にうつかり寐込んちやつて、大層遅くなつたもんだから、慌ア喰つて歸つて行つたんで、つい元の通りに爲さくのを忘れたんさ、時に今日は……又かと言はれるだらうけれど、少しどうか爲て貰へてねんだが、どうだらう」

「おや、又お前無心なの」
「だからさう言つて斷つてるちやアねわか」

「だつて熊さん、今は其處どこちやアないの、妾は悔ら爲て了つて、まだ此處が」とお庄は眉を蹙めつゝ胸先を仰へた、

へ入りながら、袂から口附の巻煙草を取出した、

「わ、何、何をそんなに怖ら爲たんさ」
「何ね、人様の事だけれど、妾はこんなに驚いた事はないの、また驚く筈さ、こんな變な事は無いんだからね」

「何をそんなに驚いたんだよ、一人で同じやうな事はつかし言つてたつて、己にやアから分らねわや、何さ、わ」と熊さん顔を突出した、

「だがね、お前は口が軽いから……そんな大切な事でも無暗に喋り歩くんだから、うっかり話されないけれど、實は私市様の奥様の事でね」

「あの何か、つまり嘘だつたけれど、返子で殺されたつて附のあつた」

「さう、お殺されなすつたと言つたのは間違で、ほんとは御無事だと言ふ事だつたし、言ふだけぢやアない、今日三番町へ歸つて入らしつたんだけれど、それが變なの、妾はどうしてもね、矢張り

りお殺されなすつたんだらうと思ふの」
「わッ、だがお前、殺されたんぢやアねわてへ事が、新聞に出たさうだせ」

「さア、どういふ譯でそんな事が出たんだか、妾は不思議でならないのさ、矢張りお殺されなすつたらうと言ふ證據を……人から聞いたんぢやアないよ、今妾が見て來たもんだもの」

「ど、ど、どういふ證據」
お庄ははつと氣付いた様で「さうだつて、うっかり話し掛けた

けれど、もう止さうよ、お前は屹と喋り歩くから、一旦嘘になつて了つた瞬間が、また立つに違ひない、すると誰がそんな事を言出したんだらう、髮結のお庄だらうと言ふ事になつて、妾はお出入りを止められて了ふもの、一番大切なお華主を失錯つちやア大變だから、是ばかりはお前には話せないの」
「へッ、薄情な事を言ふぢやアねわか」

「おや、能くそんな事を言はれるねわ、妾がこんなに稼いで居ても、相替らすお金に不自由して居るのは、誰の爲だと思ひだ、よ、みんなお前へ入上げるからちやアないか、薄情い心でそんな事が出来るかい」

「なに、それは能く承知してるさ、お前の親切は知ってるから、何日までも蕎麥屋の出前持なんぞ爲て居ねわで、何か商賣でも爲て、お前を樂に暮させやうと思ふんだけれど、思ふばかりで働がねわもんだから……」

「ほう、さう何も心配させる積で言つたんぢやアないけれど……併し熊さん、お前まだ遊んで居ても好いのかい」
「いや、もう歸らなくつちや、ちやアまた晩に遅く来るよ」

夜はすでに明放れて、私市家の表も奥も、がら／＼と雨戸を繰

其三十九

明ける最中に、書記の木村仲造は、今配達して来たばかりの毎朝新聞を取上げて、心忙しく立つたまゝ、飛々に見出のみを見て居たが、はつと驚きつゝ某記事に目を止めて「こりやア奇體だこりやア奇體だ」と首を掉りつゝ言續けて居る、

井上佳作ははや自宅から出勤して来た、仲造は直に新聞を持つて行つて「井上さん、どうも奇體ぢやアありませんか、まア御覽なさい、先には東都新聞でしたが、今度は毎朝新聞にこんな事が出ましたよ」

「はてね、また變な事でも書かれたんかね、どれ／＼」と佳作は新聞を受取つて「成程、是だね、私市家の怪聞、同家の夫人元子と言へるが返子にて變死せし事は、一時専ら世人の噂に上りしも某新聞の証言に依りて、殆んど堰滅に歸せんとせしが、そは某新聞が何か爲にする所ありて、故意に事實を隠蔽せしものと覺しく昨今又々變死せしに相違なしと傳ふる者あり、加之も同家に縁故

ある者の口より出でしと言へり、依りて思ふに、必ず何等か奇怪の伏在するなるべく……」

「どうです、井上さん」

「變な事を書きぢやアないか、奥様は返子からお歸りなすつて、現に此方に居らつしやるんだのに、誰がこんな詰らない事を言ふのだらう、同家に縁故ある者の口より出たところがあるが……」

「誰でせうかね、何れ出入の奴か何かでせうよ、直ぐ奥様にお目に掛つた者なら、こんな事を言ふ譯がありませんから、併し井上さん、新聞は違ひますけれど、二度もこんな事が出るんですから」と俄に聲を潜めて、萬一これが事實なんかも……」

「おい、考へて物を言ひな、奥様は御無事で居らつしやるぢやアないか」

「それがさ、或とすると、替玉といふやうな事かも知れませんが、すよ」

「そんな事があつて堪るもんか、まづ假りに替玉なら、末子様の外に、あれほど奥様に似た方は廣い世界に一人もない、所でその末子様はどうだ、米國へ行つてらつしやるぢやアないか」

「けれどね、そつと今まで日本に隠れて居らつたんかも」

「ねえ、好い加減に爲なよ、確に米國へ直航の船に乗つて行らつたし、その後電報だのお手紙だのが、如彼して米國から来たんだもの」

「それもさうです、ぢやア一旦米國へ行らつて、そして直にお歸りなすつたやうな事ぢやアありませんまいか、たゞの噂だけなら一度限で止んで了ひさうなもんですし、それにこの毎朝新聞のは厭に斯う確らしく見えますからね」

「ぢやア君はこの新聞に出て居る通り、東都新聞が賄賂でも取つて、御當家の爲に事實を枉げたと云ふのか」

「いや、そんな事はありません、東都の社員が奥様にお目に掛つ

れもするから、日本の古代の文章を翻譯して、當校から出す同窓雑誌へ掲げやうと思ふ、就いては妾の所持の物語全集を送つて下さいとあるのだ、末子さんの本箱を尋ねたら、有るに相違なからうけれど、實はそんな事を元子に知られると言ふと、少々面倒な事があるのだから、そつとお前へ話しに来たのさ」

「な、成程」

「だから今此處へ来た事も内分だよ、外の者へも口止を爲て置いて下さい」

「心得ましてございます」

「それで序だから頼んで置くが、この後末子さんから手紙が来たら、すぐ奥へは持たせないで、襦とお前の手許へ預かつて置いて貰ひたい」

「承知しました」

「其處でだ、この物語全集は別に新しく買つて、知れないやうに

送りたいたいと思ふのさ」

「それはその方がお宜しうございませう、どんな御本か存じませんが、なに、高價な物でもございませうまいから」

「だから氣の毒だけれど……いやお前を煩はすにも及ばない、これ木村、お前神田邊の本屋へ行つて、物語全集と言ふのを買つて、そして直に荷造を爲て、此處へ向けて出してくれろ」と小五郎は封筒を渡しそのまゝ其處を立去り掛けた、

「あ、旦那様」と佳作は慌てゝ呼止めて「今朝の毎朝新聞をまだ御覽には……」

「まだ見ないよ、何か變つた事でも」

「はい、どうも怪しからん事で、また奥様の事をば、御變死遊ばしたに相違ないと申すやうに書いてございませうので」

「わッ、また、奇、奇體だね、なせ有りも爲ない事を何度も書くのだらう」

「誰か、喋つたと申すやうに書いてございますが、兎も角一應御覽に……」

「さうさ、兎も角見やう、實に怪からん事だ」と小五郎は足早に歸つて行つた、

佳作は後に仲造を見返つて「どうだ、末子様からあんなお手紙が来た位だ、先刻言つた君の説は、いよ／＼當らない事に極つて了つた」

「さうですよ、新聞の方もいよ／＼嘘に極つて了りました」

「それもさ、あのお手紙が、三原さんが代筆でも爲たんだと、萬に一つ疑念が起らないにも限らないけれど、末子様は始終この勘定揃へ入らしつて、徒ら書をなすつたから、今に能く覺わて居る、あれは全く御直筆なんだからね、時に君、早く行つて来て貰はう、併し」と小五郎で「君も聞いて居た通り、奥様へは内分だよ」「承知して居ますとも、旦那様が奥様へ御内分になさる譯は、仲

造ちやんと知つてるんですもの、は／＼／＼／＼」

其四十一

元子はすでに起きて出て、後から小間使に衣物を着せさせて居た、

小五郎はすつと入つて「元子、また何か書いたさうだよ、今度はその新聞へ」

「さア、只今見て驚いたんでございますが、貴夫はまだ御覽遊ばさないの」

「まだ見ない、今些と聞いたんさ」と言ひながら、小五郎は毎朝新聞へ目を注いだ、

「まアどうでございませう、道理らしく能く左様な事をさ」

「成程、これは亂暴だ、馬鹿々々しい」

「この妾は矢張り殺されて了つて居るのでございませう、ほ、

能く左様な巫山戯た事が出せませうのねわ」

「實にさ、何だか當家に縁故のある者が喋つたやうに書いてあるが、だつて新聞社も不穿鑿千萬だ、こんな無根な事を出してくれちやア、此方の迷惑はどれほどだか」

「また當家に縁故のある者つて、一體誰でございませうねわ」

「誰だらう、無論この家の者ぢやアない、家の者なら、こんな間違つた事を喋る筈がないから、何れ外の者だらうよ」

「どうせ左様でございませうけれど、うつかりは出来ませぬのねわ」

「ほんとにさ、此方に覺はないけれど、何か恨んでゝも居る者があつて、こんな拵へ事を言觸らすのだらうよ」

「さうとよりは思はれませんけれど、だつて妾が斯うして此處に居りますのに、目に見わた嘘を言つて、どう爲やうと思ふのでございませう」

「眞に量見方が分らない、だが安心さ、親類や知邊がお前の無事に歸つた事を知つて居るのだから、今度は誰も新聞を信じやア爲ない、その證據には、以前の時は、まだ門が明かない先から弔悔の客が来たさうだけれど、今日は今になつても、まだ誰も遣つて来ないもの」

「でも矢張り取消は出して頂きませんぢやア」

「それは出すさ、早速井上に書かせやうが、實に餘計な手数を掛けさせるよ」

「まだそれから……取消は取消で出して、また別に誰が斯様な事を申しましたのか、是非調べて頂きたいもので」

「さうだとも、能く取組して、酷く懲らして置かないぢやア、またこの後もある事だから」

「左様でございませうよ、人の噂は七十五日と申しますけれど、こんな風ぢやア、三度でも五度でも、噂がなくなるごまた言觸らす

でせうから」

小五郎はにつと笑つて「だが元子、却つて好いかも知れないよ」

「おや、何故でございます」

「だつて死んだ噂を立てられると、長生をすと言ふぢやアないか、それが一度限ではないのだから大きに妙さ、お前が今言つたやうに、始終死んだ噂を立てられて居ると、生涯死ぬ折がなくなつて了つて、何處まで生延びるか知れやア爲ないのだから、はよムムム」

元子は急に眉を蹙めて「あら、御冗談ごちやアございませぬよ、今度は慣れたとでも申すのでございませぬか、此間の時ほどには驚きませんでしたけれど、それでも何がか厭アな心持で、鬱いで居るのでございますもの」

「ぢやアもう此處に居ないで、東京へ歸つて了はう、と言つた所で、すでに歸つて居るのだから、元子、また氣の變るやうに、今

度は何處か温泉へでも出掛けやうぢやアないか」
「それも宜しうございますね」

其四十二

末子が書物を取りに寄越した後、およそ半年ばかりも経つた頃、付添の竹枝から手紙が来た、その用向は、末子は横濱を出發以來、輕症の肺を患ひて居たが、近來俄に差重つたとの通知で、併し名醫の治療を受けさせて居るから、心配無用と書添へてあつた、小五郎は他の事とは違ふからと言つて、元子へも話した上で、直に見舞の電報を打つて、また別に委しい見舞状を出した、その後二週間も絶つと、また竹枝から、今度は電報が掛つたが、南無三、遂に好くなかつたと言ふ訃であつた、
私市一家は忽ち動揺し愁傷して、取敢へず親族へ飛報に及んだ、
玉木文平は時を移さず馳付けて「小五郎さん、何だかもう寐耳

に水で、本統とは思へないやうですが、豫てそんな様子があつた
んですか」

小五郎は過日の竹枝からの手紙を見せて「この通りでございま
す、通知はございしましたけれど、心配は無用とありましたから、
まさか斯様な事に立至らうとは思ひませんでした、實にもう飛
んだ事になりました」とがつくりと首を投げた、

元子は傍に坐つて居るのだが、流石「お力落しで」と冷評しも
爲なかつた、

文平は自然に催す涙を押へて「残念な事を爲しましたよ、斯うと
知つたら、朕がつて居たものを、無理に外國へは遣らなかつたん
さ、時に小五郎さん、後をどうする積です、せめて死骸は取寄せ
て、日本の土に爲て遣りたいもんですが」

「さア、その事を御相談申さうと存じて居たんでございます、取
寄せたいのは山々でございますけれど、死なれた土地へ葬つた方

が宜しくはありませんが、その事に關らず、是非誰かを遣はさ
なければなりません、それも海上と陸地とで、今から二十日餘
りは掛るでございませうから、まづ三原に假埋葬をさせて置いて、
参つた者が到着の上で、改めて本葬をさせる、そして三原と共に
遺娶を持つて歸らせて、此方でまたそれを厚く葬る、と申す事に
いたしましたら、如何なものでもございませう、近い所ではないので
から、お説のやうにするのは大變で」

「それもさうです、併し元子はどう思ふね」
「妾は仲は悪うございましたが、こんな事を聞きますと可哀さう
で、死骸にでもごうぞ一目と存じますけれど、やはり夫の申すや
うに爲た方が宜しいかと……」

「成程、お前もその量見なら、ちやア小五郎さん、彼地で葬る事
に爲ますか」

「その方が好いでございませうよ、そして米國へは木村を差向け

る事に爲まして、まづ大略を三原へ電報で言つて遣りませう」
 「そして小五郎さん、英國の芳也の方へも知らせて下さいよ、許嫁であつたんだから」
 「はい、その儀はお詞までもございませぬ、末子さんが修行に参られしました時も、通知して置いたんでございませぬから、すぐ電報を打つ積で居りますので」
 「さうして下さい、芳也もさぞ落膽する事でもせうが、黙つては居られない、其處であの分家だが、もう瓦も葺上げて、左官が入つて居るまでになつたんだから、是からは仕事の運が早いのだけれど、肝腎分家をする人が亡くなつて了つて……だが今更工事を止す譯にも行かないから、建上げた上はさうするとも、普請はあのまゝ續けさせませうねわ」
 「それは左様でございます」

其四十三

木村仲造は亡き末子の後事を處置する爲に、故々米國へ出發したが、四五日も経つた後、三原竹枝と共に歸朝した、小五郎は早速二人を奥座敷へ通して「三原さん、貴女には大層御厄介を掛けましたよ」
 竹枝は洋服で不様に坐つて「どういたしましたして、折角お供を爲て参つて居ながら、申譯のございませぬ事が出来まして」
 「なに、壽命だから仕様がなひです、木村、お前も通々の所を御苦勞だつた、言つた通りに計らつてくれたか」
 「はい三原さんと御相談の上で、旦那様が仰しやいました通りに、厚くお弔ひ申しましてございませぬ」と仲造は此處へ携へて来た小靴から、長い切髪を恭しく取出して「これは三原さんがお取置き下さいました御遺髪で」

小五郎は懐しさうに受取つて、「これが末子さんの遺髪だと思ふと、今更また悲しくつてならない、早速親類へ通知して、日を選んで葬る事に……」

佳作を始め小間使など、末子の臨終の模様を聞かうと言ふので、次の間へ来てすらりと並んだ、

元子もこの時挨拶に出て、「三原さん、どうも飛んだ事でございましたね、貴女はさぞ御心配下すつたでございませうが、またどうして末子はあんなに急に亡くなりましたので」

「はい、申すも涙でございませう、なるべく御心配をお掛け申すまいと存じまして、手紙を差上げました時は、軽いやうに書きましたたが、實はもうあの時はね、餘程お衰へ遊ばして居らしたんでございませう、でもいよく御平癒なさらないと存じましたら、本統を御通知申すのでございましてけれど、お醫者はお命に別條はないと申しますので、それならお願がせ申すでもない、あんな

に認めたくないのでございませう、所がいくら彼方の名醫でも、誤診と申す事は免れられないものと見なしまして、お可哀さうに末子様は……

遂にね、貴女……」と言ひさして、竹枝は手巾で顔を抑へた、

「そして、死ぬ時に何か遺言はいたしませんでしたか知ら」

「いや、別に御遺言はございませんでしたけれど、妾は初は此方へ来たくはなかつたが、斯うして来て了つた上は、もう日本へ歸るのは厭だから、此處で死ぬのは本望だと仰しやいましてね、それ限で御落命でございまして」

元子は驚き顔で「おや、外國で死ぬのが本望だつて」と不審した、

仲造は思はず傍から「私は委しく三原さんに承りまして、成程と存じました、御親族様の悪口に涉りますから、高い聲では申せませんが、お嬢様は芳也様をお嫌ひで、今度日本へ歸つたら、厭な方と婚禮を爲なければならぬと申すお心がございませうから、

左様に仰しやつたものと見えます、お悲しい御臨終の時に、外國
で死ぬのが本望だと仰しやつた御胸中をお察し申しますと、實に
もう御不便で……」

次の間の一同は言合したやうに俯向いて、みな等しく鼻を吸つ
た、

小五郎も目を展叩きながら「三原さん、まだぐお聞き申した
い事もありませんけれど、さぞ疲れて居らつしやるでせうから、ま
た重ねて承る事にしませう、ねえ元子」

「左様でございますよ、三原さん、久々で早くお宅へお歸りたい
でせうけれど、今にお湯が温きませうから、それまで居間の方へ
入らしつて、ゆるゆる御休息下さいまし、木村もお疲れだつたら
うから、自分の部屋へ行つて休んでおくれな、さア、貴方も御一
所に参りませうよ」と元子は小五郎を促しつゝ立つて行つた、

竹枝は後から引添ひながら、極めて小聲で「もし、末子様」

元子は慌てゝ振返つて、竹枝の洋服の袖をぐつと引きつゝ、夫
の居間へ速込んだ、

其四十四

小五郎は二人を居間へ入れて置いて、四邊に人氣のないのを見
定め、さて入つて座に着いて「三原さん、私も微に聞付けたが、
彼處で末子様と言つて呼掛けるなんぞは、よし小聲にしる不注意
過ぎますよ」

「なにね、それは心得て居りますから、うつかりお呼び申したん
ではございませぬ、誰もお傍に居ませんでしたから」

「だつて壁に耳と言ふぢやアありませんか、これから以後もある
事だ、氣を付けて下さいよ、併し此處へは誰も来ませんから、何
を言つても差支はないです、所で早速肝腎の物をお上げ申さう」
と小五郎は手提の金庫を引寄せて、帯を爲した紙幣を取出し「お約

束のお禮です、爲替で差上げやうと思ひましたが、勘定場の者に
怪しまれては大變ですから、餘程以前から少しづつ貯へて置いた
んです、さア、高をお取め下さい」とぼんと前へ投出した、
竹枝は一禮すると共に取上げて、大紙幣を長く掛つて敷へて居
た、

「三原さん、さぞお骨を折れたでせう」

「いや、もうお禮を頂いて了りましたから、打明けて申しますが
ね、貴君の方とは違ひまして、妾の方は何の造作もございませ
でしたよ、まだ當地に居ります間は、末子様は玉木様に居らしつ
て、貴君にお逢ひ遊ばす事が出来ませんでしたさうですから、船
へ乗りますと、妾から貴君の思召をお傳へ申して、そしてサン
ランシスエへ着きますと直に、また横濱へ参る船へお乗換申しま
した、それは御直々に末子様からお聞きなすつたでございませう、
妾は發覺しやすい郵便の消印の廉がございませうから、早速オハイ

オへ参りましたが、餘り暇で、まア官費で寐に行つたやうなもの
でございしましたね、偶に偽の電報や嘘の手紙を出す位の事で、
何も用がないのでございしますもの、ほんとに遊び倦きましたよ、
併しお便をする時機と申すものがございしますから、その間合を計
りますのには、些と頭を痛めました、船中で末子様に仕入れて置
いて頂いたお手紙、例の物語全集の外ののだの、あれに順序
を付けて、それく見計らつて差出しましたが、好い場合に参り
ましたか知ら」
「みんな好い都合に着しましたよ」
「それは宜しうございました、あれだけ隔たつた土地に居りまし
て、今頃はこんなお都合になつて居るだらうから、この方の手紙を
出さう、もうこの邊まで運んで居らつしやるだらうから、今度
斯ういふ電報を打たうと言ふやうな鹽梅式で、搜りぐ爲た仕事
でございませうから、實はございませうと存じて、そのみ心配して

居りましたの、ですがその外の事はお茶の子で、木村さんが見ねました時なんぞは、以前から墓地の番人を取込んで、ちやんと細工を爲て置いたんでございますから、假りに墓標だけ取換へた他人の墓所へ案内して、譯なく隣着して了ひましたの」

「は、ムムムム、成程大慾は無慾に似たりだ、流石の三原さんも、うっかり今の金で満足して了つて、大層手軽く言ふもんだから、貴女いくらか損をしましたよ」

「おや、何故でございます」

「だつて貴女の事だから、どうせ馬鹿に骨が折れたやうに言つて、増額の御請求があるだらうと、實は一二割は出す積で居たんですけれどまづ助かつたと謂ふもんさ」

「あら、そんな詰らない事をいたしましたねわ」

「は、ムムムム、併し今から嵩を掛けて言つても無効ですよ、またもう手柄話がありますまい」

「はい、残念ながら、妾はもう申すだけの事を申して了ひました、ちやア末子様、今度は貴女お聞せ下さいまし、あの瀬船で御歸朝なすつて、それからどう遊ばしました」

「旨く元子に成澄して居る末子は、につと笑を含みながら「妾もね、矢張り譯なく隣着して了つたんですから、割増は頂けない方なの、おは、ムムムム」

其四十五

「まア御冗談仰しやらないで、眞面目にお聞せ下さいましな」と竹枝は末子を促した、

「ちやア申しますがね、あの瀬船で横濱へ歸つて、貴女から承つた兄様の御傳言通りに、なるべく目立たないやうにと、病氣の女學生が出家養生をするやうに見せて、鎌倉のあの粗末な宿屋へ参りましたね、彼處に逗留を爲て、兄様のお便を待つて居ましたの

そして半月ばかりもすると兄様が入らしつて、もう姉を別荘へ連
出して居るのだから、大丈夫旨く行く、明日の晩月夜だつたら選
付ける、その時は別荘の裏門の鉤匙を外して置くから、お前は髪
を丸髷に結つて忍んで来て、裏門から入つて、稻荷の祠の後へ隠
れて居なご仰しやいましたから、妾はその通りに爲て待つて居ま
したの、その間は随分待遠く思ひましたから、やつと姉様の衣物や
騎下駄を持つて来て下さいましたから、妾はたいそれと着換へた
り履換へたり爲たばかりなの、もうそれで姉様に成切つて了つた
んですから、貴女よりはまだく、骨が折れなかつたんです」
「骨が折れたのは私さ」と小五郎は機好く後を受けて「何しろ三
原さん、人一人を烟にしやうと言ふ大役ですからね、容易ぢや
アなかつたです」

「左様でございませうとも」
「で、今夜と極めたその日暮でした、手頃の石をそつと舟の中へ

持込んで、船の方へ隠して置いて、前日鎌倉から買つて来た芋糺
を袂へ入れて、それから酒で勢を付けて、元子を舟へ誘ひ出して、
沖へくど一心に漕ぎましたね、どうせ聲を立てるだらうから、
陸上へ聞けないやうに思つて、殆ど江の島へ近づくかと思ふほ
ど出て了つて、其處で休息すると見せて、船を舟へ上げて置いて、
脇見を爲ながら芋糺の端を引出して、月を見上げて居た元子の後
へ廻つて、不意に咽を繰上げたんです、さア此處が肝腎だ、何れ
血を吐くだらうが、船を汚されても衣物を汚されても大變だから
と、ぐつと繰上げた直その手で、元子の首を舷の外へ突出して、
御苦勞にも息を引取るのを待つて居ました、いや、無暗に躁かれ
るのを左様遣つて堪へて居た間は、餘り心持の好いもんぢやアな
かつたですよ、だが如何に嫉妬深い鬼のやうな女も、脆く往生し
て了ひましたから、静に船へ俯向に寝させて、帯と上着とだけを
剣取つて、そして例の石を抱かせて、芋糺で確と結へ付けて、ど

んぶりと深い海の底へ水葬さ、三原さん、口で言へば是だけです
が、真に油の汗が出ましたよ」

「御道理でございます」

「だがもうそれからは何でもない、直に船を濱邊へ返して、元子の帯と衣物と履物とを持って上つて、別荘の者に覺られないやうに門を入つて、末子を持たせて置いた稻荷の後へ行つて、身装を元子の通りにさせて、末子が脱捨てた奴は祠の下へ押込んで、そして二人で玄關へ廻つて、大きい聲で景氣好く、今歸つたよッ、は如何です、旨く遣つたでせう、元子附の松でさへ、我が主人の人間が變つて居るのを氣付かないんですもの」

「成程、旨く参りましたね、併しその筈でございますよ、ちやんと御魂膽を承知して居ります妾でも、この末子様をさ、うつかり元子様だと存じます位で」

「ですがね、私は注意して遠くへ漕出したんだが、最初に首を絞

めた時、元子がきやつ——と言つた聲を、陸上で聞付けた者があつたんで、まだその上に、私一人で上陸したのを何處からか見て居た奴さへあつたんですよ」

「おや、それは大變……」

「なに、その事は新聞にまで出ましたけれど」と小五郎は笑ひながら末子を指して「元子といふ者が斯うして無事に居るんですよ、新聞は取消すし、立つた噂は立消さ、はゝゝゝゝゝ」

其四十六

女髮結のお庄は、洋燈を點して晚酌を始め掛けたが、がらりと格子戸が明いたので、持つた徳利を置きながら「太田様でございますか、今日上る積でございますが……」

「はゝゝ、お前また華主を怠けたんだな」

「あら、熊さんか、丁度好い、今お煙が付けたばかりさ」

「そいつア好い處へ來た、ちやア遣りながら相談を持出さう」
 「おや、お前の相談なら聞きたくはないよ」
 「へい、毎時の無心ちやアねいせ」
 「珍らしいのね、お金の事ちやアないの」
 「いや、金は矢張り金だけれど、利が高くつても借りて貰はうと思つて來たんさ、二百兩といふ金が入るんだから」
 「ほう、大きい事をお言ひだね、どうか爲て居るんだよ」
 「まア聞きな、今己の居る春月庵が賣物に出やうと言ふんだ」
 「ちやアそれを買はうとお言ひなの」
 「さうさ、欲しくつてならねんだ、彼處の主人は越後から來て居るんだが、國の兄が死んだんで、相続に歸らねちやアならねわてへ一件さ、處で主人が、己は十年前にこの蕎麥屋を始め、此處まで丹精したんだから、見ず識すの者に老舗を賣るのは惜しくつてならねわ、だから熊さん、お前引受けてくれねわか、この

老舗に店の諸道具を付けて賣るんだが、他人へなら五百兩、一兩切れても厭だけれど、お前が買ふなら二百兩で手を打たうてへんだ」
 「成程、あれだけ流行るお蕎麥屋が二百圓で買へるのなら、熊さん、安いもんだねわ」
 「だから欲しくつてならねんだが、お前に無心した所で、兎ても無効に極つてるし……」
 「おや、奇う輕視るちやアないか」
 「ちやアお前持つてるのか」
 「いや、妾にそんな大金のある筈はないけれど」
 「何のこつた、馬鹿々々しい、だから借りて貰へてねんだ、華主の内貸す奴があるだらう」
 「どうして、十圓の融通も爲てくれる人はないよ、だがそんな値で買へると思ふと、聞逐して了ふのは何だか惜しい、お前を春月

庵の主人に爲て、妾も髪結なんぞ止して了つて、彼處の帳場へ坐りたいねわ」

「己もその心があるから來たんさ、どうかなるめねかなア」

「さアねわ、たつた二百圓のお金だが」とお庄は俯向いて考へ出したが、やがて獨言のやうに「こりやアいつそ……」

「ねッ、何か目當でもあるのか」

「何ね、過日言つた私市様の事さ、あの噂は嘘に極つて了つたけれど、髪結の妾に限つて、嘘でない證據を握つて居るのだから、私市様へ行つてその事を話したら、二百圓位は口止料に……」

「む、さうだ、ちやアそれを言つて出させるんだ」

「けれど大切なお華主だから、そんな悪黨染みた事は言つてかれずさ」

「だつて金になつたら髪結を止すんぢやアねわか、華主も何もありやア爲ねわや、だがお前が厭なら己が行く、あの時言つちやア

くれなかつたが、その證據へのを話してくんな」

「いね、お前には話されぬ、過日些と話したら、すぐ毎朝新聞に出て了つたが、あれはお前が漏らしたんに違ひないよ」

「まアそんな過ぎた事は言はねわで、今度は強請に行かうてへ位なんだから、尻喰へ觀音さ、漏らしたつて喋つたつて好いちやアねわか」

「さうは可ないさ、いよくお金を出して下すつたら、それは口止料に貰ふんだから、外へ漏れては濟まないもの」

「は、ムムムム、そんな腰ぢやア覺束ねわもんだ、だが證據を話してくれねわちやア、己が出掛ける譯には行かず、是非お前に限るんだ、お庄、春月庵が借しいぢやアねわか」

「さア、他人に買はせるのは惜しいしねわ」

「へッ、齒切の爲ねわ、己の爲お前の爲ぢやアねわか、大きい奴でぐいと呑めて、酒の勢で行つたら好いんだ」

「さうねわ、ぢやア思ひ切つて……熊さん、この湯呑へ酌いでおく
れな」

其四十七

末子は電燈の下で小五郎と話して居たが、折柄取次に来た小間
使の詞を聞いて「おや、何故だらう、こんなに夜に入つてから、
それも今日髪を結ふ日なら何だけれど」

「いや、外の事でお願があるのをごさいますさうで、是非お目に
掛りたいと申して居ります、それに大層酔つて居りますの」

「奇體だねわ、だが是非逢ひたいと言ふのなら、妾の居間の方へ
でも……」

「此處へ通しても好いさ」と小五郎は脇から言つて、ついと立つ
て外へ躲した、

お庄はやがて小間使に導かれて来て、麴臭い息を爲ながら「奥

様、妾は」とだけは容易に言つたが、酒の勢でも言難ねるか、
途切れ〜に「今晚はその、御無……御無心にね」

「おや〜、御無心ですつて」

「へい、就きまして」と言ひつゝ見返つて「お松さん、お氣の毒
ですけれど、暫く彼方へ行つて居て下さいました、妾は構ひませ
んけれど、お差支のある事ですから」

末子は甚く怪しんで、お庄の顔を見詰めて居る、
お庄は小間使の立つて行つたのを見届けて「奥様、妾は急に二
百圓と申すお金の入る事が出来ましたので、それで是非なくね、
あの……」

末子は案外の様子で「妾に貸せとお言ひなの」
「へい、まことに申し上げ難ねますけれど」

「それは少し困りますねわ、五圓や十圓ならまだ何だけれど」
「でもお金に御不自由な貴女ではなし、些とお小遣の内からお出

「でもお金に御不自由な貴女ではなし、些とお小遣の内からお出